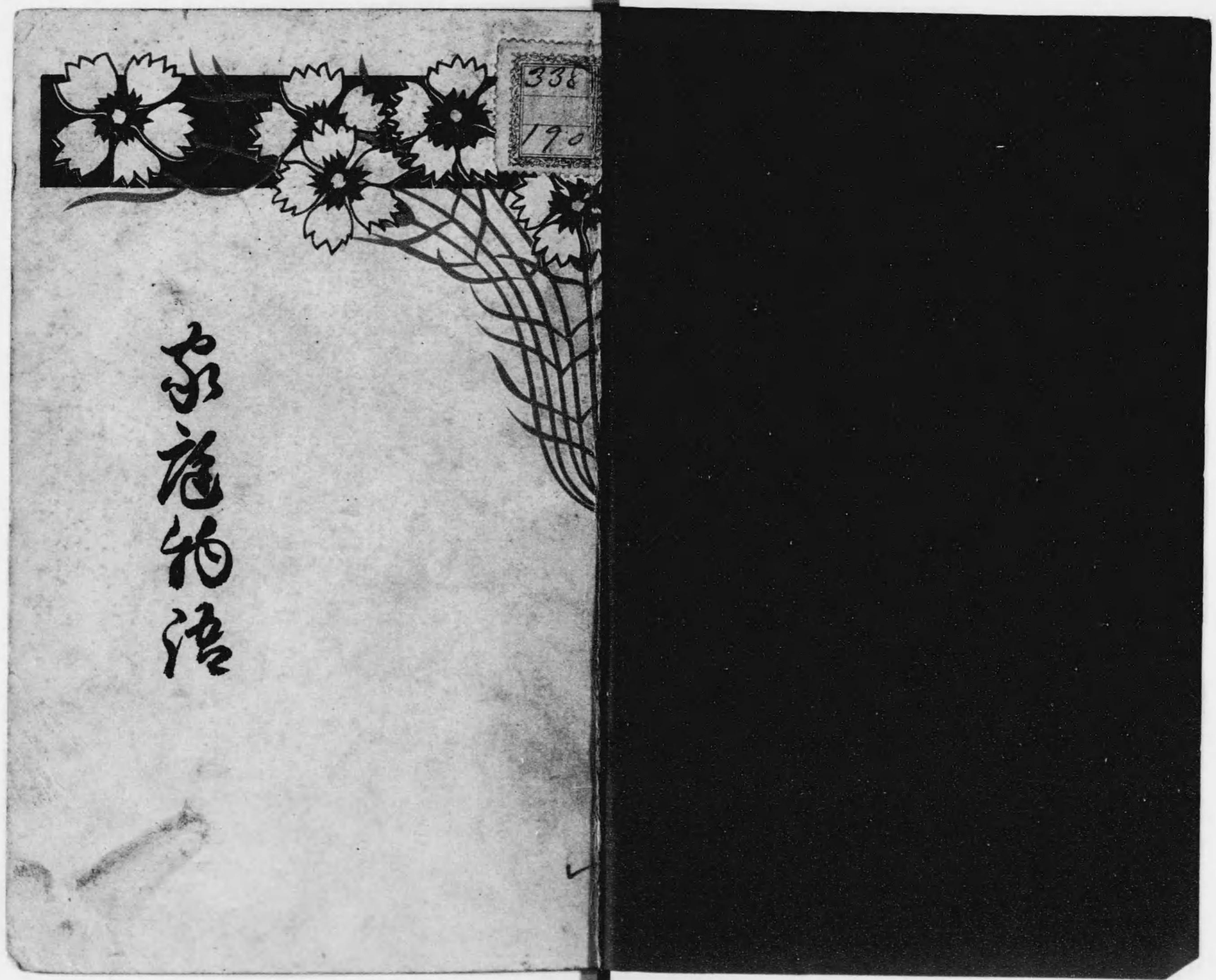
始



京花物語

338
190

338-190

帝國圖書館藏

家庭物語

松本雲舟編

大正
2. 7. 24
内交

序

私は中學校時代にいろ〳〵な英語讀本を敎はりました。その中の面白かつた話は今でも深く私の頭の中に殘つてゐます。田舍の學校で課業の濟んだ後に、有志の者だけが居殘つて復習をしたり、學校の歸途で、大きな觀音堂の仁王門の下に夏の暑さを避けて涼みながら、その面白い話を字書と首引きをしたりした昔時があり〳〵と眼の前に浮んで來ます。それからもう少し成人くなつた時に、田舍の小さい敎會の日曜學校で、それらの面白い話を稚い子供達に話してやつた懷しい記憶もあるのです。さういふ思ひ出の多い澤山な話を折があつたら集めて見たいと思つてゐましたが、この春、漸くその志を果すことが出來ました。

いろ〳〵な英語讀本に載つてゐる話は皆な撰に撰つたものですから、普通のお伽噺などとは違ひます。とりとめもない空想的なところなどはなく、面白い裡にも健全な教訓が含まれてゐます。だから家庭で小さい坊ちやん嬢ちやん方にお聽せになつても、又尋常五六年からのお子さんが、假名をたどつて獨りでお讀みになつても、其の印象はかの世間にありふれたお伽噺から受くる感化とは全く違ふ所があるかと思ひます。とにかくかういふ話を讀んで、大正年代の小さい男女が立派な品性を養ひ、健かに賢く、他日世界のため、國家のために、有益な働きをなすやうに生ひ立つことは、私の眞心よりの祈であります。

大正二年初夏

雲舟しるす

目次

一　テルわが子の頭の林檎を射りし話……（一）
二　マアキュリーと樵夫の話……（八）
三　兵隊フリッヅの話……（一一）
四　最も貴き行爲の話……（二五）
五　ワシントン子供を救へる話……（三〇）
六　聖ベルナルドの犬の話……（四〇）
七　皇帝の新しき衣物の話……（四四）
八　ブルースと蜘蛛の話……（五二）
九　眞實の勇氣の話……（五五）
十　ジュリアス・シーザーの話……（六三）

十一　ウエブスターと山鼠の話……（六六）
十二　勇ましき娘の話……（七二）
十三　王子と判事の話……（七七）
十四　マリブランと若き音樂者の話……（八二）
十五　親切なる皇帝の話……（八九）
十六　賢人ダイオゲネスの話……（九七）
十七　コルネリアの寶玉の話……（一〇〇）
十八　征服者ウイリアムの三王子の話……（一〇四）
十九　妹に救はれたる兵士の話……（一一〇）
二十　ジー河の水車屋の話……（一二二）
廿一　畫家ベンヂャミン・ウエストの話……（一二六）
廿二　王を救へる鷹の話……（一三九）

廿三　マッチ賣の少女の話……（一四五）
廿四　ベトーベンの月夜の曲の話……（一五二）
廿五　アルフレッド王と菓子の話……（一六一）
廿六　「鐘を今夜鳴してはならない」……（一六五）
廿七　アンドロクルスと獅子の話……（一七〇）
廿八　隱れたる寶の話……（一七五）
廿九　ソクラテスと其住家の話……（一九四）
三十　ホイッチントンと猫の話……（一九六）
廿一　盲人と象の話……（二一五）
廿二　大望ある年季小僧の話……（二一八）
廿三　フランクリン母を訪ねる話……（二二八）

以上

家庭物語

松本雲舟編

テルわが子の頭の林檎を射りし話

瑞西ロイスの川岸に近く、ウイリアム・テルは毎日その僅かな家畜を飼つてゐた。彼は節儉と勞働に依つて、一家の生計を立てゝゐた。

彼が弓の名人であることは何時となく世間に知れ渡つた。ウリ州で、テルほど確な鋭い眼で、岩の上を往來する鳥の群を追ふ者は一

人もなかつた。

テルの家には小さい息子があつた。ニコ〳〵した髪の毛の美しい子供である。手足は強壯で、心情は快活で、家中を賑した。

父親の飼つてゐる羊は皆な此子の友達であつた。彼は羊に一々名をつけておいた。羊が野原に遊んでゐると、子供はその仲間に入つて遊んだ。

平和に日々を送つた。その生活には悲しみの影もなかつた。毎日樂しく暮して、明日は尙一層樂しかれと望んだ。

ところて麗かな四月のある朝、樂しい此家が一時暗になつた。最も黒い悲しみが襲うて來た。あゝ運命は測られざるものである。

瑞西にはその頃未だ自由の日が明けなかつた。外國人の支配を受けて、嚴しく權利を壓へつけられた。

この自由なき時に、墺太利から、氣の荒い傲慢なゲスレルといふ人が來て、瑞西を治めることになつた。彼はある日不法にも、自分の帽子を高く差上げて、「屈め、奴隷共、御命令だぞ、嫌なら殺すぞ」と怒鳴らせた。

その朝丁度ウイリアム・テルは家を出て、小さい息子の手を引いてアルトルフの町にやつて來た。息子は屢々父親が獲物を家にさげて來るのを見て、一度獵に連れて行つて下さいと强請んで、遂に今その希望を達したのであつた。彼は父親のごとく、將來には弓の名人になりたいと思つた。

テルはアルトルフの町に來て、群衆に高く擧げられた帽子を見た。暴君ゲスレルの怒つた額を見た。傳令使は彼の耳許で叫んだ。「屈め、奴隷、屈まんか！」傲慢なるゲスレルはこの農夫の態度を眺めて、

今に地に平伏すだらうと思つた。然るにテルは平伏す所ではない。どんな棕櫚の樹でも、テルが此の人達の前に立つたほど眞直ではあるまい。

「私が膝を屈めるのは」とテルは靜に言つた。「神さま、神さまだけです。私の生命はどうにても仕て下さい。私の良心はわしのものてさ」

「此奴を捕縛れ、者共」と君主は息の詰るほど怒つて叫んだ。「上を怖れぬ不屈者め、おれを馬鹿にした。謀叛人として殺してしまへ」

ゲスレルはかう言つたが、又考へ直して、「いや、待て、此奴は弓の名人だといふ話だ。世間てさう評判してゐる。あそこにゐる髪の奇麗な子供を連れて來い。此奴の腕を試してやらう」

その近所に生繁つた菩提樹が立つてゐる。テルの子供はそれに縛りつけられた。そこてその頭に一つの林檎を載せた。子供は不思議

テルわが子の頭の林檎を射る

さうに見廻した。

テルはそれを見て聲荒く叫んだ。「惡いなら、私が惡いんです。私をどうでも仕て下さい。子供だけは、どうぞ救けて下さい」

ゲスレルは嘲笑つた。「この可愛い子供を、私はどうも仕やしない。子供の血が流れるなら、それはお前が殺したのだ。弓をうんと絞つて、矢をひゆうと射るさ。あの林檎を的にして。當つたら、許して遣はす」

怒と悲みとに群衆はがや〳〵した。男共はあんまり殘酷だと呟いた。女共は聲高く泣いた。

テルはわが愛する子供から五十歩はなれて確く立つた。その强い弓を手にして、唇を結んで、目を光らしてゐる。この世は苦と禍に充ちてはゐるが、これほど悲しい光景は又とあるまい。

ところて豪膽な子供は父親がぐづ〳〵してゐるのを見て、聲高く叫んだ。「早く射て下さい。大丈夫當ります。射り損うもんですか」

父親は言つた。「天は恵みたまふ。お前がそれだけ勇氣があるなら、私は恐れはしない。人間は無慈悲なものだが、神さまが附いてをられる」

弓は絞られた。天使に護られてゐるやうに、矢は飛んだ。林檎は眞二つに、樹の下に落ちた。

「てかした」と君主が言つた。「約束通り、お前を赦して遣はす。家に歸つて、羊を飼ふが可い」

テルは冷に言つた。「あなたにお禮を申しません。神さまにお禮を申します。でも、あなたは運の好い方だ。私が射り損つて、子供を殺して御らうじろ。あなたの生命もその時限りてさあ。二の矢は茲

にありまさあ。あなたも生命拾ひをなさつた。私の一の矢が當つたのてな」

神は義しき者を救けられた。神は罪をなさしめられなかつた。傲れる者を恥かしめ、弱き者を護りたまふた。

マアキユリーと樵夫の話

一人の樵人が川の岸に木を伐つてゐたが、圖らず斧を水に滑らすと、斧は直ぐ川底に沈んでしまつた。彼は大變當惑して、川の側に坐つて、泣いてゐた。所でその川はマアキユリーといふ神さまの川であつたので、その神さまは樵夫を憐れんで、前に現はれた。その悲しみの譯を聽いて、マアキユリーは川の底に潜つて、金の斧を持つて來て、お前のはこれかと樵夫に問ねられた。

樵夫はさうではないと言つたので、マアキユリーは又川に潜つて、銀の斧を持つて來た。樵夫は又それではないと言つた。神さまは三

度目に又川に潜つて、樵夫が失したその斧を持つて來られた。

「それが私のです」と樵夫は歡んで言つた。マアキユリーも樵夫の信實と正直とを歡ばれて、直ちに他の二つの斧をも與へられた。

樵夫の友達がこの話を聽いて、自分も同じ樣な好運にありつきたいと思つた。そこで同じ場所に行つて、木を伐るまねをして、わざと斧を川に滑り落した。そして岸に坐つて、泣く眞似をしてゐた。

マアキユリーは前の如く現はれた。そして斧を失して泣いてゐるといふのを聽いて、流に潜つて、金の斧を持つて來て、失した斧はこれかと問ねた。

「あゝ、それです」とその人は熱心に言つた。そしてその斧を握まうとすると、マアキユリーはその人の厚かましさと虛言を罰するために、それを彼に與へざるのみならず、その人の斧をも返してやられ

なかつた。

正直は最上の政略である。

兵隊フリッツの話

一

兵隊フリッツは普魯西軍の伍長の小さい息子で、ブランデンブルグに住んでゐた。彼は兵隊ごつこをして遊ぶのが好きなので、兵隊フリッツと呼ばれるやうになつた。

彼の父は佛蘭西との戰爭中、ライン河邊の聯隊に居つた。嘗て家に手紙を送つて、時々野菜がないので困つてゐると書いた。「善い馬鈴薯の五升もあつたら、どんなに甘いだらう」と言つた。

日夜兵隊フリッツは氣の毒な父親のことを想ひ又夢見た。遂に彼

はお母さんには内證で、穴庫の最も善い馬鈴薯を袋に入れて、父の許へ持つて行かうとして、出かけた。

旅の初日の午後、小さな村に入つて、最初に見つけた旅舍に行つて、腰掛に坐つて休んだ。その旅舍の大きな室に大勢客がゐた。その中に義足の年老つた跛の兵士がゐた。

「何か用かね、子供」と兵士は起上つて、フリッヅの方へ歩みよつて、驚いたやうに頭から足まで見廻した。

「私はラインへ行くんです」と答へた。「私のお父さんは昇進して、軍曹になつたが、馬鈴薯がないから、ちつとも面白くないさうです。だから、馬鈴薯を持つて行つてやらうと思つて、一番善いのを選つて來ました。この袋の中にあります」

「うん、面白い子だな」と兵士が言つた。「本氣のことなら、もう一度

話してごらん、そしたら能く解るだらう」

フリッヅはもう一度話した。誰も皆熱心に聽いた。話し終はると、老兵の眼には涙があつた。他の者も皆感動した。

「お前は眞實に軍人の子だ。私の年老つた心はお前のやうな子を見ると嬉しくつてぶる〳〵する」

かう言つて、老兵はフリッヅを捕まへて接吻した。他の人も同樣にした。そこにゐた肥つた主人すら、心の底まで感動した。彼等はその日フリッヅをそれより先に行せなかつた。フリッヅはその旅舍に宿つて、王子でもあるやうに待遇された。

晩になつて、フリッヅは新しい客に又その話をした。遂に一つの部屋に案内されて、柔かな寢床にねかされて、安らかに睡つた。フリッヅが睡てゐる間に、彼の老兵は客に向つて、こんな大膽な子供

を一錢も持せずに旅をさせるのは、自分等の耻だと言つた。

皆悦んで財布を開けて、善い子供のために寄附金を出した。主人は朝までその金を預つておいて、子供が目醒めると、朝餐を御馳走して、その短衣の縁に金を縫ひつけて、心から氣をつけてお出てよと言つた。

其處から、夕方まで歩いて、フリッヅは又ある村で夜を過さねばならなかつた。そこで前のやうに話をして、優しく待遇された。

數日旅をして、遂に彼は普魯亞軍の第一の哨兵を遠くに見た。飛ぶやうにそこへ急いで行つて、

「私の父さんはどこにゐるてせう」と唐突に問ねた。

「馬鹿な子供だな」と哨兵が亂暴に言つた。「お前の親父の名を己が知つてゐるものかい。それから何聯隊に居るかも解らんぢやないか」

「擲彈兵のプランデンブルグ聯隊で、マルチンボールマンといふ軍曹です」

「さうか、それが眞實なら、捜すが可い。通れ」

フリッヅは走り過ぎた。第二、第三の哨兵の所を過ぎて、遂に副官の手で精しく調べられた。副官は聽けば聽くほど、フリッヅに親切にして、遂に子供の頰を大變親切に撫でゝくれた。

「私についてお出て」と副官が言つた。「直きお前の父さんを捜し出せるだらうから」

副官は廣い旗がひら〳〵してゐる大きな立派な天幕の方へ歩いた。フリッヅは悦んで馬鈴薯の袋を擔いで、副官の側について行つた。副官が手招きをするので、畏がりもせず天幕に入つて行つた。そこに年老つた立派な軍服の將校が軍卓の側の大きな安樂椅子に坐つて、

熱心に地圖を見てゐた。彼は、フリッヅと一緒に來た副官が恭しくその側に近づくと、一寸見上げて、輕く點頭いた。

「これは大將に違ひない」とフリッヅは入口の側に立つてゐながら、想つた。それは眞實だつた。副官は大將に低い聲で話すと、大將は直ぐ地圖から眼をあげて、副官の話を熱心に聽いて、折々フリッヅの方へ忙しく眼を向けた。大將は副官に何か命令して立去せてから、フリッヅを差招いた。フリッヅは直ぐ側へ行つて、兵士の態度で、大將の前に立つた。

「お前は何といふ名か」と大將が問ねた。

「フリッヅ・ボーレルマン、それから兵隊フリッヅと呼ばれてます」

大將は笑つて、又問ねた。「何處から來ましたか」

「プランデンブルグから」

「何しに來ましたか」

「父さんに馬鈴薯を持つて」

「實際の事かしら」と大將は獨語を言つて、「そんなら其の袋の中にあるのか」と聲高く言つた。

「はい。家の穴庫中で一番善いのです」とフリッヅは肩から袋を下して、それを開けて、「これを御らんなさい、皆な小石のやうに丸くつて滑々してゐるでせう」

「成程、成程、皆な奇麗で、甘さうだ。では、次の室に行つて、私が呼ぶまで待つてゐなさい。袋は暫く茲へ置いておいて」

フリッヅは命令通りにして、大きな安樂椅子に坐り込んだ。其の日大變歩いて疲れてゐるのと、漸と安心したので、直き居睡を始めて、遂に睡込んでしまつた。大將は半時間ばかり經つて、その室に

入つて來たが、子供が睡てゐるので、その儘にして、窃と出て行かれた。

フリッツが何もかも忘れて睡てゐる間に、大將は彼のために忙しかつた。ブランデンブルグ聯隊の老軍曹マルチン・ボーレルマンを漸く搜し出された。大將は晩餐に來るやうに軍曹に命令を與へて、同時に高等武官の中の或る人達を招かれた。それから料理人にある大切な命令を與へることを忘れなかつた。

二

客は好い頃に集つて、食卓の側に坐つた。大將の食卓の側に、軍曹服を着た唯の軍曹が居るので吃驚した者もあつた。併し一番吃驚したのは、軍曹自身であつた。

軍曹の次に、最も目立つたのは、布を被せた大きな皿であつた。客はその中に必ず美味い御馳走があるだらうと想つた。早く喰ひたいものだとその方に目を向けた。大將は彼等の好奇心を看て取つたが、それがなんであるか、幾分でも知せて、滿足させやうともしなかつた。彼はその皿を見ると、微笑んで、意味ありげに副官と顏を見合せた。好奇心は益々激しくなつた。

遂に大將は大きな聲で、軍曹に皿の被ひを取れと命じた。誰も皆ひとしく不思議な皿を見た。何が入つてゐたか。皮のついた馬鈴薯、それは實に不思議にも奇麗で美味さうであつた。けれども美味ものに飽きた客にとりては、尠からず失望であつた。唯心から悅んだのは、軍曹ボーレルマンで、漸くその驚きと嬉しさの叫び聲を抑へた。

「今まで」と大將は輝く微笑を唇に漏して言つた。「今まで諸君は私の

お客であつたが、この立派な馬鈴薯を喰べるためには、軍曹ボーレルマンにお禮を言はねばならない。この馬鈴薯は彼のものである」

將校達は馬鹿〳〵しさに肩を縮めた。大將は彼等の不機嫌に少しも頓着しない。

「諸君はどうしてこの馬鈴薯が我が軍に來ましたかを知られたら、その唯一つを貰うことを名譽に思ひたまふてあらう」

「どうしたのですか、どんな事があつたのですか」と彼等は問ねた。

「どうぞお話し下さい」

「私か、否、私は美しい談を話すのは下手ですからな。併し諸君もわが正直なボーレルマンも稍々好奇心に苦しんでをられるやうだから、別な方法で滿足させてあげませう。副官、話手を連れて來て下さい、どうぞ」

副官は去つた。皆熱心に入口の方に眼を向けた。

ボーレルマンは若しやといふ疑ひが心にきざしたので、胸が破裂しさうにどき〳〵した。蒼くなつたり赤くなつたりして、大將がまじ〳〵と非常な興味を以て自分を見てゐられるのにも氣が付なかつた。忽ち窓掛は引寄せられて、副官の側について、輝く畏なき眼を以てあたりを見廻しながら入つて來たのは、兵隊フリッツである。

「フリッツ！」と軍曹は長官の前をも忘れて、腕を擴げて前へ飛び出しながら叫んだ。「フリッツ、どうして茲へ來た」

子供は答へなかつた。唯大きな聲を出して、父の胸に飛び着いた。二人は長い間抱き合つてゐた。將校達はこの不思議な光景を深く感動して眺めてゐた。親切な善人である大將の眼には、歡びの涙がきらきらした。

「お話しなさい、お前がどうして茲へ來ましたか」と大將が言つた。

「併し、まあ緩りして、食卓の側へ坐りなさい。なにもぐづ〳〵しないても可い。王樣の食卓でも差支へない。お前の眞の孝心はこの名譽を得たのだ」

將校達は皆注意けてゐる。フリッヅは父の手を握りながら、話をした。すると將校達の嚴格な態度は益々親切になつて、その顏は益益輝いた。父を愛する心から百哩以上の路を馬鈴薯を持つてやつて來た子供のことを面白く思はざるを得なかつた。老軍曹は全く嬉しさに夢中になつて、泣いたり笑つたりした。

話が終ると、軍曹は居る所をも忘れて、再三大膽な息子を抱いて、幾度となくその唇に接吻して、種々な事を尋ねると、フリッヅはあからさまに答へた。

大將が注意したので、一同天幕を去つた。大歡びの父とその愛する子供だけが殘つた。一時間の後、大將は還つて來て、大膽なる老軍曹の片手に大きな書物と片手に金貨の一杯入つた大きな財布を與へた。

「これは卿の軍役免許狀で、終身の年金として今まで通りの俸給をあげることが記してある。又これは我々將校が集めた金で、卿の立派な息子にあげる些少の贈物である。息子が生長するまで、それを貯へおいたら、有益に使へませう。これから妻子の許へ歸つて、家の者を大いに喜ばせたが可い」

「あゝ大將閣下、あまりの御親切て」と歡べる軍曹は吃つた。將校の待遇や年金や息子フリッヅへの金など、そんな澤山な幸福をどうして受けてよいやら解らなかつた。「私はどうしてそんな恩惠にあづか

られませう」

「それは戰爭中、卿の大膽なる働きのためです。先日の戰に卿は終身不具になる傷を受けたからです。最後に又卿の子供、兵隊フリッツのためです。

フリッツのために、卿は善き父とならねばならん。卿のやうな人は戰場にあるよりも家に居つた方が忠義になるのです。安心して歸りなさい。そして神の保護に依つて、この純潔な眞實の兵隊である子供のやうに、卿の子供全體を訓練んだら可い。さやうなら。フリッツがわが國王のために武器を持てるやうに大きくなつたら、わが聯隊に送ることを忘れてはなりませんぞ」

最も貴き行爲の話

金持の波斯人が年を老つて、仕事に骨が折れて來たので、自分の許に僅かな隱居料を殘して、其の財產を三人の息子達に分けてやることにした。

息子達は皆滿足して、難有くその配分を貰つた。そしてこれを適當に用ゆることを約束した。この大切な仕事が終つてから、父親は息子達にかう言つた。

「さて倅達、まだ一つお前方に配けなかつた物があります。それは、これ、この價の高いダイヤモンドである。私はこれをお前方の中で

最も貴い行爲をした者に上げるつもりです。

だから、お前方は三ヶ月の旅行をなさい。三ヶ月經つてから、又茲で會ひませう。そしてお前方の仕た事を聽きませう」

そして息子達は出かけた。それ〴〵別な方角に三ヶ月の旅行をした。それが濟むと、皆還つて來た。その旅行の報告をするために、父親の許に集つた。長男は先づ第一に話した。

「父上、私の旅行中に知らない人が價の高い寶石を澤山私に頂けました。勘定もなにもしないのです。その包みの中にどれだけ澤山寶石があるか、その人が知らないことは確かでした。

その中の一つ二つを取つても分らなかつたでせう。私は露見る心配もなく容易く自分を富ますことが出來たでせう。でも、私はその包を受取つた通りに正格と返してやりました。これは貴い行爲では

ありませんか」

「悴」と父親は答へた。「單純な正直は貴いといふことは出來ない。お前は正直な事をしたとはいへるが、それ以上の事をしたのではない。若しさう仕なかつたら、お前は不正直であつたのだ。恥づべき行爲をする所だつた。お前は善くさうした。でも、貴い行爲ではない」

それから次男が話をした。「私が馬に乘つて旅行をしてゐると、或る日湖水の側で貧しい子供が遊んでゐるのを見ました。私がその側を通ると、恰度その兒が水に落ちて、危く溺死しさうでした。

「私は直ぐ馬から下りて、水の中へ飛び込んで、子供を救ひ出しました。その村の人達は皆私の言ふ所が實際である事を父上に保證します。これは貴い行爲ではありませんか」

「悴」と老人が答へた。「お前は唯お前の爲すべき事を爲したのだ。お

前がその子供を救はなかつたら、子供を見殺しにするわけだ。お前も、善い事をしたのだが、貴いことではない」

やがて三男が進み出てその話をした。「父上、私には一人の敵があります。して、永年私に澤山惡い事をしたり、私の生命を取らうとしたり仕ました。

旅行中或る晩私は崖の頂上の側にある危險な路を通つてゐました。私が馬に乘つて行くと、馬は路に何か居るのを見て吃驚しました。私はそれが何物かと思つて馬から下りて見ると、私の敵が崖の直ぐ緣に寢てゐるではありませんか。寢てゐて一寸でも動けば、轉落ちて、下の岩に衝突つて片々になつてしまひます。

彼の生命は私の手の中にありました。私は彼をその緣から引張つて來て、それから眼を醒させました。そして無事に歸るやうに言ふ

てやりました」

そこで年老つた波斯人は大歡びて叫んだ。「うん、怜、ダイヤモンドはお前のものだ。敵を救けて、惡に報ゆるに善を以てするのは、貴い神樣らしい行爲といふものだ」

ワシントン子供を救へる話

一

一千七百五十年の靜かな麗かな日。場所は水の流に近いヴァジニアの北の森林の地のことである。

測量の器械がそこに置かれてあつた。數名の男が木の下に休んでゐた。その服裝や樣子によると、この國の荒地の開墾に從事してゐるものらしい。

この人達は恰度晝食を終つた所である。仲間から離れて丈の高い堅實した體格の若者がぶら〳〵してゐた。その確乎した步調は戶外

の運動に慣れたものらしい。

その顏は普通の若者には見られぬほど決斷のある男らしい容子である。年は十八を越えてはゐまい。

突然「あれい」といふ叫び聲が一つ聽えた。それが又聽える。はては幾度も叫び聲が續いた。それは女の聲で、森の中の小さい一區の向ふ側から起つたらしい。

第一の叫び聲で、若者は聲のする方へ首を向けた。幾度も叫び聲がするので、彼は低い林の傍を走つて、直きに川岸の廣場に出た。そこには小さな丸太小舍がある。

若者が低い林から出て見ると、川岸には大勢の仲間が群つてゐた。その眞中には一人の女が立つてゐる。彼の聽いた叫び聲はこの女が發したのである。二人の男がその女を抑へてゐるが、女は身を解き

放さうともがいてゐる。

女は直ちに若者を認めて、叫んだ。「もし、貴郎、あなたに御願があります。どうぞ私を放さして下さい。私の子供、私の子供が川に溺れたんですのに、この人達は私を行せてくれません」

「氣が狂つたのだ。川に飛び込うと思つて」と一人の男が言つた。「この激流ぢや、直ぐ粉微塵になりまさあ」

若者はその言葉を皆まで聽かずに、四歳になる大膽な小さな子供、その美しい眼と亞麻色の髪の毛とて誰にても可愛がられた子供を思ひ出した。

子供は小舍の前の小さな庭の裡で遊ぶことになつてゐた。所で門が開け放しになつてゐたので、窃と拔け出して、川の縁へ行つた。そして川を見下してゐるところを、お母さんに見つかつた。

お母さんが想はずアレイと叫んだので、その心配した通りになつてしまつた。子供はお母さんの叫び聲に吃驚して、その平衡を失つて、川に落ちた。岩にせかれて泡立てる危險な流の中に落ちたのである。

數名の人が川の縁に近づいて、子供の後に飛び込まうとした。だが、川のあちこちにある鋭い岩、急流や水の渦を見、又子供を救ける手段が能く解らんので、彼等は尻込みをして、冒險を止めてしまつた。

この立派な若者はさうでなかつた。彼は先つ第一に上衣を脱き棄てた。次に川の縁に飛んで行つた。一寸立留つて、目早く種々な急流、最も危險な岩を看て取つて、泳いで行く路を定めた。

若者は泳いでゆく方針の定るか定らぬ内に、水の中に白いものが

見えたので、それは子供の衣物だと思つて、直ぐ様荒い吼ゆるやうな流に飛び込んだ。

「あゝ嬉しい、子供を救けて下さる」とお母さんが叫んだ。「あそこにゐる、子供が、私の可愛い子供が。どうして見殺しに出來ませう」

人々は皆水涯の崖に走せ登つて、熱心に若者の泳ぎ進むのを見送つた。急流は颶風が羽を吹きまくる如く、若者を運んでゆく。

水の泡立つ突出た岩に衝突りさうなこともあつた。又渦卷に引込れて、とても救かるまいと思はれたこともあつた。

時々急流に吸ひ込まれて、若者の姿は見えなくなつた。それでも數秒の中には、その姿の見えなくなつた遙か川下に又現はれるのであつた。

岩と怒れる水とに戰つて、偉い若者は、その危險な仕事を成就するために熱心に前に進んだ。岸に立てる人達は片唾を呑んで見てゐる。

二

母親は眼を見張つて水と爭ふ若者の後を追ふのであつた。若者が見えなくなると、その心は沈むのであつた。又彼が水に浮き上つて強い腕を以て波を搔き、懸命に子供を捕まへようとするのを見て、いかばかり歡んだであらう。

けれども若者がいかに熱心に努めても、子供を救けるとは覺束なかつた。急流は十尺も離れぬ眼の前に、子供を運ぶのであるが、それに追ひ付くことが出來なかつた。

子供は二度姿が見えなくなつた。痙攣るやうな叫び聲が母親の唇

から洩れた。けれども二度姿を現はした。母親は兩手をあらく悶へて、心配に息もつけずに、川下に流れゆく子供を見送つてゐる。

若者は今や二倍もその力を現はすやうてあつた。川の最も危險な場所に近づいてゐるからてある。

この場所の水の早さは怕ろしかつた。小舟ても碎片にされるとを怖れて、誰もそこに近づかうとしなかつた。

子供に直ぐ追付くにあらざれば、若者の運命はいかになるべきか。彼は充分に危險の增すことを感じてゐた。て、今や死物狂ひに泡立つ急流を通して前進した。三度子供を捕まへんとしたが、水のために獲物をもぎ取れた。

三度目に捕まへようとした時には、急流が瀑にならうとして勢すさまじくなれる所てあつた。その失敗したのを見て、母親は落膽し

た。若者がその冒險を中止することと思つて、母親は呻いた。

然るに若者は唯益々熱心に前に進むのてあつた。息も吻ずに、泡起つ水の中を見てゐると、若者の姿は子供の直ぐ後についてゆく。

今や追ふ者も追れる者も瀑の崖に進んだ。二人共瀑に卷込まれんとして泡立てる水の中に居るのが鮮然と見えた。人々はそれを見て頭の中がぐら〳〵した。

けれども見物人は若者の右の腕に高く子供が差上げられたのを見て、一齊に叫んだ。その叫び聲は二人が下の激流に消え失せたので、忽ち恐怖の聲に變つた。

母親は前に走つて、眼を見はつて瀑壺を眺めた。突然嬉しげに叫んだ。「あそこに居ます。あれ、二人共救かりました。あゝ神さま、有難うございます」

若者は怪我もしなかつた。瀑の下の泡立つ渦卷の中から恰度出て來た。片手に高く子供を差上げて、片手で岸の方に水を搔いて來る。人々は驅け寄つた。叫んだ。若者は將に岸に泳ぎ着かうとしてゐる。人々は疲れ果てゝゐる若者を引上げた。

子供は感覺がなかつた。母親は子供に未だ呼吸があると言つて、胸に抱へた。若者は岸に着くや否や、力盡きて氣絕した。

母親は靜に子供を蘇生らさうと努めた。子供が息を吹き返して、安かに腕に眠つた時に、母親は熱心に生命の恩人に禮を言つた。

「神さまは貴郎に報ひたまひます。今日の御働きの御禮に神さまは大いなる事を貴郎になさいませう。私のお禮の外、幾千倍のお禮を貴郎になさいませう」

實にさうであつた。この時の偉い若者はその後大いなる國民の運

命を負つて立つた。その一生の間に凡ての人から尊敬されたのは、この母親の子を救けたやうな犧牲の精神があつたからである。この犧牲の精神こそ、ジョオジ・ワシントンの特質であつた。

聖ベルナルドの犬の話

聖ベルナルドの犬は甚だ大きくつて強かつた。頭は大きく、毛は長く、尾は房々してゐた。高尚な容子の犬で、その容子のやうに高尚で又賢かつた。

この犬の家はアルプス山の中にあつた。それは瑞西の高い山である。その山には「谷合」と呼ばれてゐる大變嶮しい狹い路が幾本かあつて、伊太利に山越が出來るやうになつてゐる。

夏でもこの山には雪の暴風があつた。長い冬の季節には非常に激しい雪暴風がある。だから、谷合は大變危險であつた。雪暴風は時

時麗かな樂しい朝にも突然にやつて來た。雪は積りに積る。數時間の裡に、旅人は積る雪の下に埋められてしまふ。

數百の人々が冬の季節にこの山を越えやうとして生命を失つた。けれども聖ベルナルドの犬の賢さと親切のために、生命の救つた人も多い。

これらの犬がさう呼ばれるのは、聖ベルナルドの寺に飼れてゐるからである。その寺はアルプスの最も危險な谷合の一つである大いなる聖ベルナルドの谷に建てられた。

茲に信心深い坊さん達は旅人を救けるために、年中住んでゐた。そして犬を使つて、大勢の生命を救ふことが出來た。

犬は行方知れずになつた旅人を搜すやうに慣された。冬には毎日二匹づつ送り出された。一匹の犬は頸に食物の籠と酒瓶とを懸けて

行つた。他の一匹の犬は脊に外套を結びつけられた。だから、犬は飢えて凍えた人を見つけるや否や、直ぐ食物と衣物を供給することが出來た。

旅人が歩くことが出來ると、聲高く吠えながら、寺の方へ案内する。坊さん達は犬が歸つて來たのを知つて、旅人を迎へに出る。旅人が氣絶して動くことが出來ぬと、犬は坊さん達の所に歸つて、旅人の倒れてゐる所へ案内してゆく。

時々旅人は雪の中に深く埋つてゐる。坊さん達だけなら、とてもその旅人を見出すとは出來ない。然るに犬は鋭く臭を嗅いで旅人を發見する。足で雪を掻き分けて、坊さん達がそこに來るまで吠えてゐる。

或る犬はかうして四十三人の生命を救つたといふ。その犬の名は

バアリーといつて、賢く又大膽であつた。或る時一人の女が小さい子供を連れてこの山を通ると、雪崩に出あつた。バアリーは小さい子供が怪我はしてゐないが、冷たく固くなつてゐるのを見出した。彼はその子供を脊中に乘せて、寺まで連れて來たので、その子供は坊さん達に救けられたさうである。

皇帝の新しき衣物の話

昔し昔し新しい衣物を大好きな皇帝があつた。尠くとも其の時間の半分は價の高い衣裳を眺めたり、それを層ねて見たりして、ほくほく嬉しがつてゐられた。

ある日その都に二人の賢い惡漢が入り來んだ。彼等は織布者て、色彩も意匠もすばらしい織物が出來ると言つた。それから作つた衣物は不思議な性質のもので、おのが役目に適當てない人や、同僚に尊敬される値のない人の目には見えないといふのてあつた。

「どんなに尊い衣物だらう」と皇帝が考へた。「私がそんな衣物を着た

ら、この國の人て役目に適當しない者や、信用するに足らない者が解つてしまふ。さうだ、その衣物を早速作へさせよう」。そて二人の惡漢に直ぐ始めるやうに命令された。

惡漢は機を据えて、織つてゐるやうな振をした。併し實際それは詐僞てあつた。一番立派な絹糸が要るの、一番奇麗な金がいるのと言つたが、彼等は皆なそれを自分の懐に入れてしまつて、朝から晩まて空の機を織つてゐた。

「織布者はどれほど私の不思議の衣物を織つたかしら」と皇帝は考へた。「だが、適當な忠實な者を送らなければならん。さもないと織物が見えんから」

そて皇帝は總理大臣を呼んて、不思議な織物を調査して、實際の報告をするやうに命じた。

總理大臣は織物の特別な性質を知つてゐたが、早速皇帝の命令を承知した。彼は長い間保つてゐた高い役目に對して、自分の適當なことを信じてゐたのである。

年老つた大臣が室に入つてみると、二人の惡漢が空の機を織つてゐる。側に寄つて、大きく眼を開いて見たが、機は全く空のやうだ。

「これはどうしたものだ。何にも見えない」と大臣は口の中で言つた。

惡漢共は自分等の織つてゐる美しき布を御覽下さい、どうです、このきら〳〵した色を奇麗な意匠はと言つた。かう言ひながら、機の布に手をやつて、その美しさを指さすやうな風をした。けれども悲しいかな、大臣には何も見えない。この不思議な織物が見えないと言ふのも知慧のないことだと思つて、眼鏡で覗くやうにして、成程、これは奇麗だ、美しいとさも感心したやうに叫んだ。

大臣は歸つてから、織布者から聽いた通りな言葉で、その華かな色と珍しい意匠とを話した。

皇帝はこの役人達を試して見たいと思つて、一人〳〵機織を見せにやつて、どれほど織れたか報告をさせた。二人の惡漢は鄭寧に役人達を迎へて、その織物の美しさを詳しく說明した。すると役人達は皆この織物を見て感心したやうな風をしてゐた。

町の人々はこの不思議な織物がもう出來上るさうだと風評してゐた。機をおろす前に、皇帝は自身織物を見にゆかれた。侍臣達や、前に機を見に行つた政治家達を大勢連れて、室に入られると、二人の狡い惡漢は縱糸も横糸もない機を一生懸命に織つてゐる。

「どうしたものだらう」と皇帝は考へた。「私には何にも見えない。これは妙だ。私は皇帝には不適當かしら」

けれども君主は自分がこの不思議な衣物を見ることが出來ないといふのは知慧のないことだと思つて、いかにも滿足したやうに點頭いて、高い聲で言はれた。

「成程麗しいものだ。充分に讃めてつかはす」

お伴の者はぐるりと機のまはりに立つて、さも感心したやうな顔付をして、君主の言葉を繰返した。居合せた大臣等は近日擧行される大行列で、この新しい衣物の初着をなさるやうにと評議した。

「なんといふ美々しいだらう」と口から口に傳つた。八方から稱贊の聲がした。皇帝は即座にこの惡漢共に帝室織物委員といふ肩書を與へた。

皇帝の居られる前で、惡漢共は機から布をとる眞似をした。その所作は一々その目的に適つてゐた。精しく皇帝の身の丈を測つてか

ら、衣物を縫ふために二日の猶豫を乞ふた。皇帝と侍臣達が立去る前に、惡漢共は大鋏で急しさうに織物を斷つて、絲のない針で縫ふ眞似をした。

定られた日に帝室織物委員は不思議な衣物を持つて皇帝の衣裳室にやつて來た。皇帝は侍從長と一緒に來られて、全然上衣を脱いでから、新しい衣物を着やうとされた。二人の惡漢は何か手に持つてゐるやうに、片腕を擧げて、「これが背衣でございます、これが上衣でございます、これが外套でございます」などと言つた。

二人の惡漢はやがていかにも鄭重に新しい衣物を着せかけた。皇帝は一々それを受取つて、鏡の前でとみこみして、いかにも滿足した風をされた。そこに居る侍從も感服したやうに、皇帝の衣物に見惚れてゐた。

皇帝は新しい衣物を着てから、大玄關を下つて、馬に乘り、行列を進めやうとされた。衣物の裾を運ぶ役目の二人の侍從が屈んで、空中に何か持つてゐるやうな振をした。何も持つてゐないやうに見られまいとした。

皇帝はやがて馬に乘られた。行列は前へ進んだ。見物人は皆評判の高い美しい衣物を一目でも見たいと思つた。皆距頭立ちになつて待つてゐた。所が何も見えない。けれども誰も失望したやうな顏付もしない。不思議な衣物が見えないと思はれたくないからである。そして行列は群衆のやんやといふ稱贊の裡に進んだ。

遂に小さな子供が鋭い聲で叫んだ。

「やあ、面白い、面白い、帽子と襯衣と股引ばつかりで、何にも着てゐないや」

この子供の口から出た言葉で謎は解けた。新しい衣物を着た皇帝は忽ち大勢の物笑ひになつてしまつた。

ブルースと蜘蛛の話

昔スコットランドにロバート・ブルースといふ王様があつた。その頃は開けない野蠻時代なので、いやでも彼は大膽で賢くなければならなかつた。英國の王は彼と戰爭をして、大軍を率ゐてスコットランドに攻め寄せ、彼をその國から追ひ出さうとした。

戰の後に戰は續いた。ブルースは、六度その大膽なる小軍を以て敵と戰つたが、六度敗られて、逃げねばならなかつた。遂に彼の軍勢は散々になつて、自分も森や山の中の寂しい處に身を隱さねばならなかつた。

ある雨の日に、ブルースは粗末な小舍の中に臥ころんで、屋根から落つる雨滴の音を聽いてゐた。彼は心疲れて、何もかも希望を棄てゝしまはうと思つた。この上どうすることも出來さうでなかつた。

臥ころんで考へながら、上を見ると、蜘蛛が網を作らうとしてゐた。見てゐると、そろ〳〵と念を入れて網を作つてゐる。蜘蛛は六度一つの梁から他の一つの梁にその弱い絲を張らうとしたが、六度失敗した。

「可哀想なものだ」とブルースが言つた。「それ、その通り、失敗するだらう」とブルースは自分が六度戰に負けたことに想ひくらべて言つた。

けれども蜘蛛は六度失敗しても望みを失はなかつた。もつと念を入れて、七度網を張り始めた。ブルースはわが身の心配を忘れて、

蜘蛛がその細い絲を持つてゆくのを見てゐた。蜘蛛は又失敗するのであらうか。否、今度絲は安全に梁に運ばれて、そこに結ばれた。

「おれも、七度やつて見よう」とブルースが叫んだ。

彼は起上つて、臣下の者共を呼んだ。その計畫を話して、失望してゐる人民を勵ますために、彼等を送つた。忽ち大膽なるスコットランドの軍勢が彼のまはりに集つた。もう一度戰をした。英國の王は自分の國に歸らねばならなくなつた。

その時から、ブルースは誰でも蜘蛛を害してはいけないといふ布令を出したさうである。小さい動物が王さまを敎へたといふ此の話は誰でも忘れてはならぬことである。

眞實の勇氣の話

私は若い時、中學校に通つてゐる間に受けた敎訓を決して忘れることは出來ない。私の學校友達にハアトレーとヴインセントといふ二人の少年があつた。二人とも私よりは年上で、殊にヴインセントは餓鬼大將として尊敬されてゐた。

彼は心から惡い子供ではなかつた。併し頓智と皮肉がお得意で物事を何でも茶化す癖があつた。彼は嘲弄の種になるやうな事が起れかしと絶えず目をくばつてゐた。

ハアトレーは新入生で、誰も未だ能く知らなかつた。或る朝學校

に行く路で私共は彼が牧場の方へ牝牛を曳いてゆくのに出遇つた。私共の仲間には、ヴインセントも居つたので、これを見遁しはしない。

「やあ、あの田舎者に戯弄つてやらうぢやないか」。彼はかう言つてから、ハアトレーを呼びかけた。「おい、君、牛乳の價はなんぼだ。牛の餌は何だい。その角は幾らで賣るんだい。諸君、最近巴里の流行を見たけれあ、あの靴を見たまへ」

ハアトレーは愉快さうに笑つて、私共に手を振つて、野に牛を追つて、鐵柵の門をはづして、牧場に牛を入れ、それから又門をかけて、私共と一緒に學校へ往つた。午後學校の歸りに、彼は又牛を曳き出して、何處かに連れて行つた。毎日二三週間の間、彼は同じやうな事を仕てゐた。

中學校に來てゐる子供は大抵金持の子である。だから、牧場に牛を追ふやうな生徒を馬鹿にして、擯斥する者もあつた。殊にヴインセントの嘲弄は幾度も繰返された。

或日彼は小舍の臭を好かないからといつて、學校でハアトレーの側に坐るのを嫌つた。時々彼はハアトレーに向つて、牛は丈夫かいと問ねた。

ハアトレーはこんな惡口を言はれても、性が善いので、氣を惡くしなかつた。怒つた顔付もしないし、口返答をしたこともない。ある時ヴインセントは言つた。「ハアトレー、君のお父さんは君を牛乳屋にするつもりなんだらう」

「どうして」とハアトレーが言つた。「いや、なんてもない。唯ね、あんまり水を交ぜないやうにしろよ、それだけさ」とヴインセントが言

つた。子供等は笑つた。ハアトレーは尠しも怒りもしないで、「いや、心配したまふな。僕が牛乳屋になつたら、量を善くするよ、乳も上等なのをあげるよ」

この對話から數日經つて、學校に展覽會があつて、市の紳士淑女が大勢出席した。中學の校長は褒賞を配つた。ハアトレーとヴインセントは何れも褒賞を貰つた。二人は成績では同等であつた。

褒賞を配つてから、校長はメタルの褒賞がまだ一つ殘つてゐると言つた。これは珍らしい場合でなければ與へられない「勇氣の褒賞」である。近頃これを貰つた少年は、三年前に盲目の娘が溺死せんとするのを救つたマンナース君だけである。

校長はやがて言つた。「皆さんの御許を受けて、私は短いお話を申上げたい。先頃のことですが、ある子供達が街道で紙鳶を揚げてゐ

ると、恰度そこを貧しい少年が水車へ行つた歸途に、馬へ乘つて通りかゝりました。馬は吃驚して、少年を投げ落して、怪我をさせました。少年は家に運ばれ、數週の間床に着きました。

この災難を起した子供達は誰も怪我をした少年がどうなつたか知らなかつた。所で一人遠くからこれを見てゐた子供があつて、何か仕てやりたいと思つて、後をついて行つた。そして怪我をした少年は貧しい寡婦の孫で、その唯一の所有である立派な牝牛の乳を賣つて、生計を立てゝゐることが解つた。

あゝ、この寡婦はこれからどうしませう。牧場に牝牛を曳いてゆく孫息子は、病氣で動きがとれない。所で見舞に行つた子供は、『心配なさるな、叔母さん、僕があなたの牝牛を曳いて行つてあげます』と言つたので、貧しい寡婦は大變有難がりました。

その子供の親切はそればかりぢやない。藥を買ふ金が入るだらうと思つて、『僕は長靴を買ふためにお母さんから貰つた金を持つてゐます。今長靴がなくつても差支へないから、それを上げませう』と言ひました。

『いゝえ、どう致しまして』とお婆さんが言ひました。『そんな事をして下すつては申譯がありません。ですが、私の所にヘンリーのために買つた、牛の皮の長靴があります。ヘンリーはそれを穿けません から、貴郎がそれを値段相當にお買ひ下さい』と申したので、子供はその身窄らしい長靴を買つて、今もそれを穿いてゐます。

學校の他の子供がこの生徒が牧場に牝牛を曳いてゆくのを笑つたり嘲つたりしました。殊にその厚い牛の皮の長靴は笑ひ草になりました。併しその子供は愉快さうに大膽に、毎日寡婦の牝牛を牧場に

曳いて行くし、又皮の厚い長靴を穿いて、自分が善い事をしてゐると思ふので、いかに笑はれても嘲けられても、一向平氣でした。

その子供はどうして牛曳をするのか、その譯を說明しやうとしません。自分の慈善を知られたくないからです。でも、心の中では、善い事を見て嘲笑ふやうな似而非自尊に同情がありませんでした。

この子供の立派な行爲が偶然にも昨日敎師に發見されました。

そこで、紳士淑女諸君、あなた方に申上げたい。この子供の仕た事は眞實の勇氣ではありませんか。いや、ハアトレー君、そんなに黑板の後に隱れないでも宜しい。貴郎は嘲弄を耻なかつたのだから、稱賛を避けてはいけない。玆へお出でなさい、お出でなさい。エドワード・ジエームス・ハアトレー君、あなたの正直な顏を見せて下さい」

ハアトレーは頰を赤めて、現はれた。滿場聲をあげて彼の勇しい

行爲を稱贊した。淑女達は腰掛に立上つて、半巾を振つた。老人達は手を拍いて、目の涙を拭いた。ハアトレーの足に穿いてゐる身窄しい長靴は頭にのせる冠よりも、名譽の裝飾のやうてあつた。メタルは滿場の稱贊の裡に、彼に與へられた。

ヴインセントは心から性の惡い嘲弄を耻かしくなつた。學校が濟んてから、眼に涙をためて、ハアトレーに握手を求めて、これまての惡い癖を立派に謝罪つた。

「そんな事はもう考へたまふな」とハアトレーが言つた。「一緒に森の中を散歩をしませう。休暇て別れる前にね」子供等は皆ヴインセントの例に倣つて、握手した。そして大騷をやつて、森の中を散歩した。げに幸福な樂しい仲間てあつた。

ジユリアス・シーザーの話

今から三千年以前、羅馬にジユリアス・シーザーといふ人があつた。彼は羅馬人の中て最も偉い人物てあつた。

なぜ彼は偉かつたか、彼は大膽なる勇士て、羅馬のために多くの國を征服した。彼は事を計畫するにも、それを爲すにも賢かつた。彼はどうしたら人が自分を愛し又畏れるかを知つてゐた。

遂に彼は羅馬の支配者となつた。彼は羅馬の王樣にならうとしてゐると言ふ者もあつた。けれどもその頃の羅馬人は王をいたゞくことを好まなかつた。

ある時シーザーが小さい田舍の村を通ると、そこの男も女も子供も彼を見物しやうと思つて出て來た。五十人ばかりの人達がそこに集つて、村長が種々指圖をしてゐた。

この質朴な人達は路傍に立つて、シーザーの通るのを見てゐた。村長はいかにも傲慢に構へてゐた。彼はこの村の長であるからである。自分ではシーザーと同等に偉い人であるやうに思つてゐるらしい。

シーザーと一緒にゐた立派な武官の中にそれを笑ふ者があつた。「あそこに村の者の前に立つてゐる奴は威張つてゐるぢやないか」と言つた。

「笑ひたければ笑ふが善いが」とシーザーが言つた。「彼には傲慢な理由があるのだ。私も羅馬で第二流の人となる位なら、村の首になり

たい」

又ある時シーザーは小舟で狹い海を横切つてゐた。向ふの岸に半分途といふ處で、暴風が起つた。風はひどく吹く。波は高く荒れる。稻妻はぴか〳〵する。雷はごろ〳〵する。

幾度となく小舟は沈みさうになつた。船頭は大いに狼狽へた。幾度もこの海を横切つたが、未だこんな暴風に遭つたことはない。怖れてぶる〳〵して、舟を進めることが出來ない。蹲踞つて、呻いた。

「もう駄目てさ、もう駄目てさ」

けれどもシーザーは怖れなかつた。船頭に起つて橈を取れと命じて、かう言つた。

「何を怖がるのだ。舟は沈みはしない。シーザーが乘つてゐるてはないか」

ウエブスタアと山鼠の話

ダニエル・ウエブスタアの父エベネザアは農夫であつた。その庭の植物は屋敷の側の穴に住つてゐる山鼠のために大變害を受けた。十か十二才のダニエルと兄のエゼキイルとは、係蹄をかけて、遂にその山鼠を捕まへた。

エゼキイルは山鼠を殺してしまへば、直ぐ今まで受けた害を除くことが出來ると言つた。けれどもダニエルは柔しく默つてゐる捕虜を憐れに思つて、逃してやらうと言つた。兄弟は考が違ふので、父親にその判斷を願つた。

「うん、よし」と老人が言つた。「私が判事にならう。茲に罪人が居る（と山鼠を指さして）。お前方は辯護士だ。その生命を取るか、赦してやるかといふ裁判だな」

エゼキイルは強い議論で訴訟を始めた。先づ罪人の惡い性質を述べて、これまでなした大いなる惡事を並べた。それを捕まへるには多くの時と勞力とを要した。然るにこれを放してやれば、又侵掠をする。そして尙狡くなつて、今度は容易に捕まらないと言つた。

そればかりか、この者の皮は幾らか金になる。それ故今まで仕た損害の幾分か償へるだらうと言つた。エゼキイルの議論は要するに實際的で、茲に書いたよりも長いものであつた。

父は將來有名な法律家になるべき息子を自慢さうに見て、「さて、ダニエル、お前の番だ。お前の言ひ分を聽きませう」

これはダニエルの最初の辯護であつた。彼は兄の辯論が明かに判事の父を感動させたことを見た。そして大きな輝く黒眼で柔順しくおど〳〵してゐる動物の容子を眺めた。狹い牢屋のうちに慄へてゐるのを見ると、彼の心はあはれみに充ちて、思はず、この捕虜を放免することについて雄辯を振つた。

彼は言つた。「神は山鼠を作られた。神は山鼠をして、輝ける日光、清き空氣、自由なる野と森とを樂しましめられるのである。神は無益に山鼠を作られない。否、何物をも無益に作られない。山鼠は他の生物と同じく生きる權利を持つてゐる。

山鼠は狼や狐のやうに有害な毒物ではない。唯澤山ある野菜を尠しばかり喰つたといふに過ぎない。その野菜はそれほど惜しいものではない。彼はその賤しい生活を支へるに必要な僅かの食物を取つ

たに過ぎない。その僅かな食物は彼にとりて甘いものであり、又その生存に必要なものである。恰も母上が自分らに下さる食卓の食物のやうなものである。

神は自分らに食物を與へられた。凡ての持物を與へられた。神の賜物の僅なる割前に對して、この無口な生物も大いに權利があるにも拘らず、それを吝んでよからうか。

そればかりか、この動物は人間が屢々なすやうに、その本性の法則も神の法則をも犯しはしない。唯萬物の創造主の手から受取つた單純な害にもならぬ本能に從ふだけである。神の手に造られたので、彼は神から、生命と食物と自由とを受ける權利を持つてゐる。自分等はそれを彼から奪ふ權利はない」

ダニエルは、動物は默つてゐるが最も熱心に辯論してゐるに相違

ないと言つた。なぜなれば生命は山鼠にとりて美しく又大切なものである。それは自分等の生命が自分等に美しく又大切なものであると同じである。生命は唯神の與へたまふところである。回復することの出來ない生命を取るといふことは、いかにも殘忍無情であると言つた。

この辯論の間に、老人の眼には涙が湧いて、火に燒けた頰にころがり落ちた。父親の胸の裡は嬉しさに一杯になつた。眼の前にわが子の將來偉くなるのが見えるやうである。彼はこんな子供達を下された神を有難く思つた。

父親の慈悲と同情とはこの情ある强い雄辯に依つて醒された。判事であることを忘れてしまつて、椅子から飛び上つた。（ダニエルは自分が勝利を獲たことも知らずに、まだ論じてゐるにも拘らず）、父

親は兄の方を向いて、眼から涙を出しながら、

「エゼキイル、エゼキイル、山鼠を放してやれ」

勇ましき娘の話

露西亞の陸軍大尉で、西比利亞の北の小さい村に終身追放の罪を受けた人に、カザリンといふ娘があつた。カザリンは兩親がいかにも不仕合なことを見て、自ら聖彼得斯堡に行つて、父の赦罪を皇帝にお願ひしやうと決心した。

カザリンはその計畫を父に話すと、父は唯笑つて答へなかつた。それから母はそんな拙らないことを喋舌らずに、仕事を精出しなさいと言つた。

「カザリンや、これ」と母は言つた。「この食卓をお拭き、晝の御飯に

するのだから。それから勝手に聖彼得斯堡にお出でなさい」

所が父の笑ひ聲も母の嘲弄も、カザリンの心を變へさせなかつた。辛抱して三年間待つてから、遂に父の同意を得て、出立することになつた。

十八歳の娘にとりて獨旅は恐ろしい事であつた。廣い森や寂しい雪の原を通つて、數百哩を歩いてゆかねばならぬ。カザリンはその着てゐる色のさめた衣服のほかには、着換も持たなかつた。懷の中には唯一枚の銀貨があるだけであつた。けれども彼女は大膽な心と神に頼る信仰を持つてゐる。

カザリンは途中で最も大いなる困難と危險とに出遇つた。ある時には、日の暮方に激しい暴風に遇つた。風雨を凌ぐために森の中に驅け込んだ。それで一時は凌げたが、翌る朝までには、皮膚まで濡

れしよぼれた。

又ある時には、カザリンの宿つた家の惡者が、金を奪らうとして、彼女を殺さうとした。所て、カザリンの懷には數枚の銅貨があるだけなので、漸く生命拾ひをした。

幾度もカザリンは乞食だの欺僞者だのと言はれて、金持の家の戸口から追はれた。世事に長けたおかみさんに罵られ、無考な子供に嘲けられ、又犬に吠えられたりした。

旅行の半分途て、冬になつたので、カザリンの困難は益々大きくなつた。けれども彼女が出遇つた運送屋の中には、大變親切にしてくれる者もあつた。カザリンの頰が寒さに凍ると、雪で擦つてくれたり、又彼女に着せる羊の皮がないので、順番に自分達のを着せてくれたりして、出來るだけ面倒を見てくれた。

カザリンの尙一つの不幸はウルガ河で、小舟から轉落ちんとしたことである。そのために大變身體が惡くなつて、旅行中に數ヶ月の間、尼寺で暮した。尼さん達は大變親切に世話をしてくれた。

遂に十八ヶ月の旅行をしてから、カザリンは聖彼得斯堡に着いた。二週間毎日元老院の入口の前に立つて、議員に歎願書を差出したが、無駄であつた。幾度も失敗してから、親切な人があつて、カザリンを皇帝の許に連れて行つてくれた。皇帝はカザリンに大變親切にして下されて、その父親を直ちに審べ直すことを約束した。

その結果、皇帝はカザリンの父を放免して、妻と一緒に西比利亞から歸ることを許された。

皇帝はカザリンの貴い忍耐に感心して、何か自分のために求める所はないかと問ねられた。カザリンは追放中自分に親切であつた二

人の氣の毒な年老つた紳士を赦していたゞけたら、それほど嬉しいことはありませんと答へた。カリザンの求めた所は直ちに聽れた。

この勇しい娘とその救つた兩親との對面はいかにも感動すべきことであつた。カザリンが兩親の前に出ると、兩親は直ちに跪づいて、わが子に感謝しやうとした。するとカザリンは叫んだ。「お父さん、お母さんをお救け下すつたのは、神さまですから、私共は神さまにお禮を申しませう」

所でカザリンはこの大なる困難のために全然身體を惡くしてしまつた。カザリンは自分の生命で兩親の自由を買つたのであつた。

それから數ヶ月經つて、或る朝カザリンと一緒に住んでゐた尼さん達がその部屋に行つて見ると、カザリンは手を組み合はせて、靜に最後の永い眠についてゐた。

王子と判事の話

ヘンリー五世は英國の王位に登つた人の中で最も大膽な王樣であつた。此の王樣の下に英國の軍勢は最も大いなる勝利を得た。

けれども彼がウエールスの王子であつた時には大變亂暴な若者であつた。賤しい友達と交つたので、王子にはあるまじき、多くの賤しき愚かな所行をするやうになつた。

ある時彼の友達の一人が何か罪を犯して、大審院長の前に曳き出された。その友達は罪あるものと認められて、牢屋に入れられることに定つた。

その時法廷にあつた王子はその宣告を聽いて、大變怒つた。判事を怒鳴つけて、その友達を免すやうに命じた。彼はかう言つた。

「牢屋は王子の友達の入るべき場所ではない。己はウエールスの王子である。だから、この人を普通の盜賊のやうに、牢屋に入れさせないい」

「王子でも、王子でなくつても」と判事が答へた。「貴郎は國王の判事に向つてそんな事を言ふ權利はありませぬ。私は正義を爲すことを誓ひます。私のなす所は正義あるのみです」

王子は益々怒つて、自ら罪人を解放たうとした。けれども判事はそんな事をしてはならぬと言つて、法廷でそんな暴行をすることを止めよと命令した。

判事が落着いて語れば語るほど、王子は益々怒つた。彼はづかづ

かと判事の坐つてゐる所に近づいて、判事の面を擲りつけた。

そこで判事は王子を捕まへて、その友達と一緒に牢屋に入れるやうに、警視に命じた。「私をお擲りになつた爲めではないが、法律の威嚴を蔑視にされたからである」と判事は言つた。

判事は又王子に向つて、「貴郎は行末王樣になられる方である。貴郎が御自分で法律を犯されるやうなことで、どうして國民をして貴郎に服從せしめることが出來ますか」

この言葉を聽いて、王子は大變氣まりが惡くなつた。一言もなく、劍をそこに置いて、判事に頭を下げて、靜に牢屋へ歩まれた。

王樣(ヘンリー四世)はこの事を聽いて、かう言はれた。「畏るゝ所なく法律を行ふ判事とその法律に從ふことを知つてゐる息子を持つた王樣は幸福である」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

やがて間もなくこの王子は王位に登られた。多くの人々はその祝ひに來た。彼が若い時に大變亂暴であつたことを知つてゐる人達は、彼が王樣になつてどんな事をするかと思つて心配した。前に王子の遊び仲間であつた人達は、直ちに王樣の寵臣になれると思つてゐた。

所がそれは間違であつた。王樣は自ら馬鹿な行は止めたから、お前達も止めろと忠告された。もつと立派な振舞の出來るまでは、自分の側に來てはならぬと言はれた。

判事も亦お祝ひに來た。自分がどんな待遇を受けるか知らなかつた。多分その役目を取り上げられるものと思つた。けれども彼は唯

自分の爲すべき所をなしたので、心配はしなかつた。

所でそれは又間違であつた。王樣は大變親切に彼を待遇して、自分にしてくれた嚴しき教訓に對してお禮を言はれた。尙引續いて判事の職を勤めるやうにと語られた。

「若しも自分に息子があつて、私がお前にしたやうな事をするならば、お前のやうな大膽な忠實な判事があつて、息子を戒しめてもらひたいものである」と王樣が言はれた。

マリブランと若き音樂者の話

倫敦のある貧乏街の穢い室に、父のない佛蘭西の少年である小さいピーレは病める母の枕邊に小聲で歌をうたつてゐた。室には麵麭がなかつた。一日彼は喰ずにゐた。併し元氣を失すまいと思つて小聲で歌ひながら坐つてゐた。それでも時々淋しさと飢とを覺えて、眼に涙を浮べた。憐れな病めるお母さんにとりて、甘い蜜柑ほど善いものはなからうと思へど、一錢も懷にないのであつた。

彼が歌つてゐる小歌は、節も言葉も自分で作つたのであつた。この子は生れながらの詩人であつた。

窓の側へ往つて、戸外を見ると、黄い文字の大きな貼札をしてゐる人がある。それは今夜マリブラン夫人の公開獨唱會があるといふ廣告である。

「行きたいな」と小さいピーレは考へた。暫らく思案してゐたが、彼は手を叩いた。眼は新らしき希望に輝く。小さい姿見の側に走つて行つて、黄い捲髪をとかした。そして小さい箱から古い汚れた紙を出して、睡つてゐる母親を熱心に一目見て、家から駈け出した。

* * * * * * * * * * * *

「どなたが私に會ひたいとおつしやるの」と夫人が侍女に言つた。「私、もう、疲れて御目にかゝれないわ」

「黄い髪をして綺麗な小さい子供でございますよ。御目にかゝつた

ら、決して惡くは思ひなさらんてせうと申して居ります、それに御手間はとらせませんつて」

「それなら、呼んてちやうだい」と美しい歌女が笑ひながら言つた。

「私、子供を嫌ふことが出來ませんもの」

小さいピーレは腕に帽子を抱へて、手に小さい卷紙を持つて入つて來た。子供には珍らしい男らしさを以て、彼は夫人の方へ歩み寄つて、首を下げて、言つた。「御目にかゝりに參りましたのは、私のお母さんが病氣のためてございます。あまり貧乏なので、食物も藥もありません。あなたがもし音樂會て私の小さい歌をうたつて下すつたら、誰か本屋がそれを買つて少しの金をくれるてせう。さうすればお母さんに食物と藥をあげることが出來ます」

美しい婦人は椅子から起上つた。丈高く、立派な姿である。子供の

手から小さい卷紙を取つて、輕く小聲てその節を歌つた。

「お前さんがこれを作りましたか」と夫人は問ねた。「お前さんのやうな子供が。それから言葉も？　お前さん、私の音樂會へ參りませんか」と夫人は一寸考へてから問ねた。

「え、來たいてす」と子供は眼を光らしたが、「ても、お母さんに手が放されません」

「晩に誰かやつて、お母さんの看護をさせませう。そして茲に三圓お金があります。これを持つて行つて、食物やお藥をお買ひなさい。それから茲に入場券があります。晩に入らつしやい。私の側に席を取つておきます」

ピーレは夢かと思つた。蜜柑その他の美味さうな物を買つて、憐れな病める母の許に歸つて、涙ながら、ありしことを話した。

晩になると、ピーレは音樂會場に入ることを許された。彼は生れてから、こんな立派な場所に來たことがなかつた。音樂、無數の光、美しい女、きら〳〵するダイアモンド、絹づれの音などは、彼の眼と腦をぐら〳〵させた。

遂に夫人が現はれた。子供は夫人の輝ける顏を見詰めて坐つてゐた。寶石をきら〳〵させて、凡ての人から崇拜されてゐる此の立派な婦人が、實際自分の小さい歌をうたふのであらうかと思へば、信ぜられなかつた。

子供は息もつかずに待つた。合奏隊が擧つて小さい悲しい調を奏した。彼はそれを知つてゐる。嬉しさに手を拍いた。それから夫人は歌をうたつた。それがいかにも單純で、いかにも悲しくいかにも靈魂を和らげるものであつた。多くの人の輝ける眼は涙に曇つた。

その小さい歌のいたましい言葉のほか何も聽えなかつた。あゝいかに傷ましい歌の言葉よ。

ピーレは空を飛ぶやうに家に戻つた。今や金のことなどはどうても善つた。歐羅巴の最も大いなる歌女が自分の小さい歌をうたつた。數千の人達は自分の不幸を泣いてくれたのである。

翌日はマリブラン夫人が訪ねて來たので吃驚した。夫人は彼の黃い捲髮を撫でゝ、病める母の方へ向いて、恁う言つた。「奧樣、あなたの小さいお子さまはあなたの御運を開きました。私は今朝倫敦の大きな本屋から、お子樣の小さな歌を三百磅で買ひたいからと申込れました。御賣になつて。それだけお金が入れば結構ではありませんか。奧樣、お子樣は天からさういふ力を與へられましたのです」

淸い心の歌女と憐れな母とは一緒に泣いた。ピーレは常に神を信

ずる心が深かつたので、母の枕邊に跪づいて、母子の困難を惠んでくれた親切な夫人に幸あれと熱心に短い祈を献げた。

この祈に依つて、歌女は益々優しい心になつた。英國の貴族に神の如く敬はれながら、善い事をしながら歩き廻はつた。夫人は早く幸ひに世を逝つたが、その床の側に居つて、その枕を滑かにし、朽ざる愛情を以て死水を取うたのは、前の日の小さいビーレ、いな當時最も名高き作曲家になつたビーレであつた。

高い位地にありながら、寡婦と父なき子を助けた夫人のごときは、げに立派なる女である。

親切なる皇帝の話

アウストリアの皇帝ヨセフ二世は寛大な溫和な方で、親切と慈善を爲す事が大好きであつた。

或る時彼は普通の紳士の服裝をして、ヴイエンナの街道を歩いてゐると、十二歳ばかりの少年がびく〳〵しながら側へ寄つて來て、何か言ひたげにしてゐるのに眼が着いた。

「何か欲しいですか、子供」と紳士が言つた。その聲はいかにも柔しく、又いかにも親切さうに眺められたので、少年は勇氣を出して言つた。

「旦那様、御親切な御言葉有難うございます。私をお助力下さることが出來ませうか」

「助力ないものでもない」と紳士が答へた。「だが、何をお前は求めるのだ。乞食とも思へんやうぢや。お前の聲も様子もさうではない」

「私は乞食ではありません、旦那様」と少年は涙をほろりとして答へた。「私の父さんは陸軍の勇敢な士官でした。病氣のために、役を止めましたが、天子様から恩給を戴きました。

その恩給で、家の生計を立てゝゐましたが、二三ヶ月前に、父さんが亡くなりましたので、私共は實際貧乏になつてしまひました」

「可哀さうな子供だ」と紳士が言つた。「お前のお母さんは生きてゐるのか」

「はい、生きて居ります。家にはお母さんと二人の弟が居ります。

お母さんは數週間病氣で起きられません。私共の中一人はお母さんの側に看護してゐなければなりません。他の二人はお助力を乞ひに出かけます」

かう言ひながら、憐れな少年は大きな涙を抑へやうとしたが、涙は止め度なく落ちた。

「よし、よし、子供」と紳士が言つた。「そんなに心配せんんが善い。お前を助けるために出來るだけの事をして見よう。お前の住んでゐる近所に醫者があるかな」

「旦那様、二人あります。私共の住んでゐます所から僅か離れた所、です」

「宜しい。お前はこれから直ぐ行つて、その一人の醫者をお母さんの所へ來てもらひなさい。茲に金がある。これは醫者のためばかり

てなく、お前方を養ひ又慰めるために費つて宜しい」

「あゝ旦那様」と少年は吃驚して紳士を見上げて、「なんと御禮を申上げて宜しいでせう。このお金でお母さんの生命は救かりますし、又弟共を養ふことが出來ます」

「何も心配しないで、子供、早く行つて、醫者を呼ぶがよい」

少年は立去つた。善き皇帝は少年の母親が往つてゐる家の在る所を敬つて、その方へ歩みを向けると、直ぐそこへ着いた。

貧しい女の居る室は大變身窄らしいのであつた。

女は低い寢臺の上に寢てゐた。未だ若いが、顏は蒼く、病と貧乏に痩せてゐた。家の道具といふものは何にも見當らなかつた。母親は子供の食物を得るために持つてゐる物は大概賣拂つたのである。

皇帝が室に入ると、寡婦と子供達とは吃驚して彼を見た。それが

天子様だとは知らなかつた。

「私は醫者です。奥様」と皇帝は恭しく身を屈めて言つた。「御近所の方が貴女の御病氣を知らせて下すつたので、私の力の及ぶ御用をしたいと思つて參りました」

「まあ、貴方様と寡婦」は暫らく躊躇つてから答へた。「私は御診察して戴きましても御禮を差上げることが出來ません」

「そんな御心配は御無用にして下さい、貴女を癒して上げることが出來たら、それで澤山お禮をいたどいた事になるのです」

かう言つて、皇帝は寢床の側へ寄つて、種々病氣のことを尋ねて、それから一筆さら〳〵と紙に書いて、爐の棚の上に置かれた。

「この處方を置いて參ります、奥様。この次に參る時には、もつと快くなつてゐて下さい」

やがて彼は立去られた。それから間もなく、寡婦の長男が醫者を連れて歸つて來た。

「あゝお母さん」と少年は叫んだ。「親切な善い紳士の方がこれを皆な下さいました」。かう言つて、皇帝から貰つた金を母親の手に渡して、「もう、泣きなさるな、お母さん、この金でお醫者樣にも拂へるし、何でも買へますから。お母さんもまた丈夫になれます」

「お醫者樣はもう茲へお出てになつて、その處方を置いてゆかれました。あそこに在るあれを御覽」と母親は爐棚の上の紙を指さした。少年は紙を手に取つて、その文句を見るや否や、愕然して嬉しさうに叫んだ。

「あゝお母さん。これはお醫者樣がこれまでに書いた一番善い處方ですよ。恩給の指令書です、お母さん、貴女の恩給の—天子樣が自

分で御書きになつた。お聽きなさい、お母さん、かう言ふのです—『夫人よ、御身の息子は幸ひにも町で私に遇つて、私の最も勇敢なる士官の一人の寡婦が生計が出來ずに、貧乏と病氣に苦しんでをることを知らせてくれました。私はそれを知らなかつたのだから、私が惡いわけではあるまい。

私の帝國に起ることを何でも知ることは私にとつて困難です。所で私は今御身の困窮を承知したのだから、私の力に及ぶ救助をしなければ、私は實際不人情なわけです。だから、私は直ちに恩給簿の中に御身の名を書き上げて、二千圓の年金を與へます。御身はこれからそれで永年生活するようにせよ。

ヨセフ二世』

寡婦と子供達はそれから皇帝の特別な御恩を受けた。父親の大膽

と母親の柔しい性質を受け繼いだ子供達のためには、立派な出世の路が開けたのであつた。

賢人ダイオゲネスの話

希臘のコリントにダイオゲネスといふ甚だ賢い人が住んでゐた。この人に遇つて、その言ふことを聽くために、諸國から大勢の人が來た。

ダイオゲネスは賢い人であつたが、妙な癖があつた。人間といふ者は實際必要なものゝ外は要らないと言つてゐた。彼は家には住まないで桶の中に眠つた。その桶をあちこちに轉ばして歩いた。日向ぼつこをしながら、周圍に寄つて來る人々に善い事を敎へた。

ある日の正午に、ダイオゲネスは提燈をつけて、街中を歩いて、

あちこち何か搜してゐるやうてあつた。

「日が照つてゐるのに、どうして提燈をつけてゐるのですか」と或る人が尋ねた。

「正直な人を見つけやうと思つて」とダイオゲネスが答へた。

アレキサンダー大王がコリントに行くと、町の重立つた人は皆迎へに出て、その偉いことを讃めた。けれどもダイオゲネスは行かなかつた。然しアレキサンダーは自分のことを何といふかこの人の意見だけは知りたかつた。

この賢人が行かないものだから、大王の方てやつて來た。ダイオゲネスは路側て、桶の側に横になつてゐた。彼は日向ぼつこをしてゐたのてある。

彼は大王と大勢の人がやつて來たのを見て、起き上つて、アレキ

サンダーを眺めた。アレキサンダーは挨拶して言つた。

「ダイオゲネスよ、私はこれまてお前の知慧のことを能く聽いてゐた。お前のために何てもしてやりたいと思ふが、何かあるかな」

「ございます」とダイオゲネスが言つた。「もう少し側に寄つて下さい。日が當りませんから」

その答は大王の想つてゐたことゝは大變違つてゐるので、大いに驚いた。けれども怒りはしなかつた。唯この妙な人を益々感心するばかりてあつた。大王は馬に乘つて歸らうとして、その臣下に言つた。

「お前はどう思ふ。私はアレキサンダーたらずんば、ダイオゲネスたらんとするがな」

コルネリアの寶玉の話

數百年以前古い羅馬の市てのことてある。ある麗かな朝、美しい庭の園亭に、二年の少年が立つてゐて、花や木の間を散歩してゐたお母さんとお友達を眺めてゐた。

「お母さんのお友達つて、奇麗な人だね」と年下の少年が兄さんの手を握りながら言つた。「まるて女王のやうだ」

「それてもお母さんほど奇麗ぢやないや」と年上の少年が言つた。「それは奇麗な衣物を着てゐるさ。ても顔が氣高くも柔しくもないもの。お母さんの方が女王のやうだ」

「それはさうだね」と弟が言つた。「この羅馬て家のお母さんほど女王のやうな女はないね」

間もなくお母さんのコルネリアが兄弟の話してゐる所へやつて來た。質素な白い衣物を着てゐる。腕と足はその頃の風俗によつて、露出してゐる。環も鎖も手や頸に光つてゐない。その唯一つの裝飾は、柔かな褐色の髪の毛が頭に束ねてあるだけてある。兄弟を眺めて、その氣高い顔に柔しい笑を洩した。

「ねえ、坊や達」とお母さんが言つた。「一寸お話しがありますよ」

羅馬の少年は平素教へられてゐる通りに、お母さんの前に立つて、辭儀をした。「何てすか、お母さん」

「坊や達は今日御庭て御一緒に晝御飯をいたゞくんてすよ。叔母ちやんが珍らしい寶玉の箱を見せて下さるさうてすからね」

兄弟は耻かしげにお母さんのお友達を見やつた。その指にはまつてゐる指環のほかに、まだ指環を持つてゐるのだらうか。あの頸にかけられた鎖のほかに、まだ玉を持つてゐるのだらうか。

質素な戸外の食事が濟むと、女中は家から箱を持つて來た。お母さんのお友達がその箱を開ると、少年の眼に寶石がきら〳〵と光つた。乳の如く白くつて、繻子の如く滑かな眞珠の綱や、火のやうに赤いルビーの塊や、夏の日の空のやうに青い青玉や、日光のやうにきら〳〵光るダイアモンドなどがあつた。

兄弟はそれらの玉を暫く眺めてゐた。

「あゝ」と弟が低い聲で言つた。「お母さんもこんな奇麗なものを持つてゐると善いな」

やがて箱は閉られて、大切に持つてゆかれた。

「ほんとうですの、コルネリアさん。あなた一つも寶石をお持ちにならないの」とお友達が問ねた。「そんなに困つてゐらつしやるの」

「いゝえ、私、困つてはをりません」とコルネリアは、二人の少年を自分の側に引寄せて、「これが私の寶玉ですよ。あなたの玉よりも一層價の高い」

兄弟は決してお母さんの自慢と愛と注意とを忘れなかつた。それから幾年か經つて、二人共羅馬で偉い人になつても、少さい時に庭であつたこの事を決して忘れなかつた。

征服者ウイリアムの三王子の話

昔英國で征服者と綽名されたウイリアムといふ偉い王様が、三人の王子を持つてゐた。

ある日ウイリアム王は何事かを考へて、大變悲しさうであつた。御側にゐた賢い人達がどうなされましたかと問ねた。

「私は今考へてゐたのだ」と王様は言つた。「私の子供等は私の亡い後にはどうするだらうと思つて。子供等が實く強くなければ、私が折角取つた王國を護つてゆけない。實のところ私は三人の中誰に王位を繼したら善いか迷つてゐる」

「王さま」と賢い人達が言つた。「王子方がどんなものを一番お好きか、それさへ分れば、どんな御人物か御話しすることが出來ます。御一人づつに二三の御問ねをしましたらば、どなたが御位を繼ぎなされたら善いか分るでありませう」

「それは善い思ひつきである」と王様が言つた。「お前方の所に子供等をやるから、何でも尋ねて見てくれ」

賢い人達は暫らく互ひに話しあつて、一人づつ王子達を呼んで、同じ質問をして見ることにした。

最初室に來たのは王子ロバートである。彼は丈の高い我儘な少年で、「短い靴下」と綽名された。

「王子さま」と一人の賢人が言つた。「私の御質問に御答へ下さい。若し貴郎さまが子供でありませんで、鳥でしたら、何の鳥にならうと

御思ひですか」

「鷹」とロバートが答へた。「私なら鷹になる。あの鳥ほど大膽な立派な武士に似たのはないからな」

次に來たのは父の名をそのまゝ繼いだ御氣に入りの王子ウイリアムである。彼はニコ〳〵した丸顏で、髪の毛が赤いものだから、「赤王子」と綽名された。

「王子様」と賢人が言つた。「私の御質問にお答へ下さい。若し貴郎様が子供でありませんで、鳥でしたら、何の鳥にならうと御思ひですか」

「鷲」とウイリアムが答へた。「私なら鷲になる。強くつて大膽だから。他の鳥に畏がられて、鳥の王だからな」

遂に一番年下なヘンリーがそろ〳〵歩いて、眞面目な考深い顏をして來た。彼は讀んだり書いたりすることが好きで、「立派な學者」と綽名された。

「王子様」と賢人が言つた。「私の御質問にお答へ下さい。若し貴郎様が子供でありませんで、鳥でしたら、何の鳥にならうと御思ひですか」

「椋鳥」とヘンリーが答へた。「私なら椋鳥になる。行儀が善つて、親切で、誰が見ても可愛いから。それに他の鳥のものを奪つたり、害したりしないから」

やがて賢人等は互ひに暫らく話し合つて、意見をまとめて、王様に申上げた。

「御長男のロバート様は大膽な立派な方でゐられます。大事業をなすつて、御名を擧げなさいませう。ですが、最後には敵に打敗けて、

牢屋で御死れになりませう。

御次男のウイリアム様は鷲のやうに大膽な強い方でゐられます。ですが殘酷な事をなさるので畏れられ憎がられます。惡い生活をなされて、恥かしい死に方をなされませう。

御末子のヘンリー様は賢い用心深い平和な方でゐられます。敵と戰をなさるにしても、唯止むを得ない時だけに戰をなさいませう。家では愛され、外では尊敬せられ、大いなる領地を御持ちになつて、平和に世を逝りなされませう」

幾年か經つて、三人の王子は成人になつた。ウイリアム王は病の床に臥して、もう世を逝るのも間がなかつた。そして再び自分の亡い後に三人の王子はどうなるだらうと考へた。

王様は嘗て賢人が言つたことを思ひ出した。然しロバートには佛

蘭西の領地を與へ、ウイリアムを英國の王になし、ヘンリーには何にも土地を與へないで、唯黄金の箱をくれることにした。

所が遂には賢人等の豫言した通りになつた。「短い靴下」のロバートはその好きな鷹のやうに大膽な遣り放しな人であつた。彼は父から貰つた土地を皆な失して、遂には牢屋に入れられて、その中で死んだ。

「赤王子」のウイリアムは傲慢な殘酷な人で、人民から怖れられ又憎がられた。惡い一生を送つて、森で狩をしてゐる時に、臣下の一人に殺された。

「立派な學者」のヘンリーは黄金の箱を貰つただけであつたが、遂に英國の王様になり、又父の王が取つた佛蘭西の領地をも支配するやうになつた。

妹に救はれた兵士の話

「アレン様、私は悴のペンニーを國家のために出征ましたのてすが、親の身にとつては、これほど貴い寶はありませんや。勿論ありませんだ。ところが悴めが唯一分間眠つたといふのて。番兵をしながら、一寸の間眠つたといふのて。ペンニーに限つて、義務を怠るやうな奴ぢやありません。敏捷もあるし、信頼になる奴てすのに。

さうてすとも、一寸の間睡りこけたんてさ。まだ年が若いし、丈夫てありませんからな。丈は私ほどありますが、まだ十八てすわい。それを番兵をしてゐる間に眠つてゐるのが見付つたからと言つて、

射殺さうなんて。二十四時間、電報に、たつた二十四時間と書いてありますわい。あゝペンニーは今ごろどうしてゐますか」

「天の神さまにお祈りをしませう」とアレン氏が慰め顔に言つた。

「さうてす。さうてす。お祈りしませう。神さまは恵深い方だから」

『私は恥しいてすよ、父さん』とペンニーが言ひましたつけ。『成人になつても、この大きな右の腕を用ゆることが出來ないかと思へば』つて、私の前に、自慢さうに、その腕を出しまして、『國家のために用ゐないて、百姓なんてしてゐるなら、この腕が痺れてしまへつて』ね。

『さあ、出かけろ、悴、神さまがお前を護つて下さる』と言つてやつたてした。神さまは護つて下さる、な、アレン様』と農夫はこの最後の言葉を繰返して、さう理屈をつけて見ても、尚心ては神の保護を疑ふやうてあつた。

「眼の球を見るやうに、疑がつちやいけない、オウエンさん」とアレンが言つた。

プロスソムは側に蒼い頰をして坐つてゐたが、涙を零さなかつた。彼女は誰も氣がつかぬほどに、心配を隠してゐた。仕方なしに家の仕事をしてゐた。折しも臺所の戸を靜に叩く音がしたので、戸をあけると、近所の人が手紙を持つて來てくれたのであつた。「兄さんからだ」と彼女は言つた切てある。

これは死んだ人からの消息のやうてあつた。オウエンはその手紙を受取つて、ぶる〳〵しながら封を切つて、アレンの方へ差出した。

牧師アレンはその手紙を開けて、讀んだ。

「お父さん。この手紙がお父さんに屆く時には、私はこの世には居りません。初めは畏かつたてすが、よく考へたら今ては怖ろしくな

くなりました。私は縛られず目隱しをされないさうてすから、男子として死ぬことが出來ます。お父さん、國のために、戰場に出て、花々しく戰つてなら兎に角、義務を怠つた爲めに、犬のやうに射殺されるのかと思へば、辛いてす。それを思ふだけても、能く氣絶しないかと思ひます。てすが、私はお父さんを耻かしめません。委細こゝに御知せします。私の亡い後は、私の友達に話して下さい。私は話すことが出來ませんから。

ジエムミー・カールのお母さんに、私はその息子の面倒を見ることを約束しましたね。ジエムミーが病氣の時に、私は出來るだけの事をしてやりました。彼は隊に歸ることを命令された時に、未だ眞實に丈夫てありませんてして、その夜の前日、私は進軍の時、自分のほかに、彼の輜重を皆な擔いてゆきました。夜になると、騙足を

させられたので、輜重は大變重たくなりました。誰も皆疲れました。が、殊にジエムミーは、私が時々腕を貸さなかつたら、路で倒れてしまつたでせう。

陣屋に歸つた時、私は疲れ切つてしまひました。所でジエムミーが哨兵の番でしたので、私はその代りをしました。でも、父さん、私は非常に疲れ切つてゐたので、銃で頭を突れても、目を醒してゐることが出來なかつたでせう。知らずに眠つてしまつて、目を醒した時には、もう晩かつたんです」

「うん、それで善つた」とオウエンが手紙を讀むのを遮切つた。「ベンニーは矢たらに睡るやうな子供ぢやないです」

「そんな譯ですので、私は今日尠しの猶豫を與へられました。お父さんに手紙を書く閑をやるのだと、善良な大佐が言ひました。お父

さん、大佐の事を惡く思つてはいけません。彼は唯その爲すべき事をなさるのですから、彼の力に及ぶなら、悅んで私を赦して下さるでせう。又私を赦してジエムミーを代りに死せるやうなことはなさらんです。氣の毒なジエムミーは斷腸の想をして、只管私の代りに死なして下さいと歎願してゐるんです。

お母さんを想ひ、妹のブロスソムのことを想ふと耐りません。どうぞ慰さめてやつて下さい。お父さん。私が大膽なる少年のやうな死に方をしたと話してやつて下さい。戰爭が終つたら、今耻かしく思ふほどには、私のことを耻かしがらぬても善いやうになりませう。神よ私を助けたまへ。耐へ切れません。さやうなら。お父さん。

今夜、薄暗い時に、私は牛共が牧場から家に歸るのが見えるやうでした。あの懷しい小さいブロスソムが脊戸に立つて、私を待つて

ゐるのが見えるやうてした。ても、私はもう〳〵決して歸らないんです。神の惠は皆さまの上にあれ。先立つ憐れなペンニーを赦して下さい」

その夜おそく「裏の入口」の戸が窃と開いて、小さい姿が滑り出て、水車場の方へゆく路を歩いて行つた。歩いて行くといふよりも、飛んてゆくと行つた方が善い。頭を右にも左にも向けない。時々天の方を見上げては、手を組合せて、祈つてゐるらしい。

それから二時間すると、同じ小さい娘はミル停車場の側に立つて、夜汽車の來るのを待つてゐた。車掌は降りて來てこの娘を車に乗せてやつたが、手に提げた薄暗い提燈の方を見上げた娘の顔が涙でよごれてゐるのを見て怪しんだ。一つ二つ尋ねると、その事情が全然解つた。車掌は父親が獨息子を可愛がるやうに、プロスソムに親切

にした。

彼女は大統領リンコーンに兄さんの生命乞ひをするために、ワシントン市に行くのてあつた。お父さんには置手紙をして、窃と家を出たのは、そのためてある。ペンニーの手紙を懐へ入れて來た。大統領のやうな性の善い親切な人がその手紙て動かされない譯がない。次の朝紐育に着いた。車掌はプロスソムをワシントンに急行させた。兄さんの生命を救けるには、一秒の時を爭はねばならぬ。プロスソムは大變に早くワシントンに着いて、直ぐ大統領の官舍へと急いだ。

大統領は恰度朝の仕事の際て、重要な書類を見てをられた。何の訪づれもなく、戸が窃と開いて、プロスソムは眼をうな垂れて、手を組合せて、大統領の前に立つた。

「嬢ちやん」と大統領は愉快な樂しげな調子て、「こんな朝早く何に御

用てすか」

「ペンニーの生命を、どうぞ救けて！」とプロスソムは言ひよどんだ。

「ペンニー？　ペンニーといふと誰ですか」

「私の兄さんです。哨兵をしながら睡つたといふので射殺されるさうです」

「うん、さやう」とリンコーンは前の書類に眼を走らせて、「さうてあつた。とんだ睡眠をしたものだ。嬢ちやん。今は特別危險な時でしてね。幾千の生命は彼が義務を怠つた爲めに失はれる所であつた」

「私の父さんもさう申しました」とプロスソムが眞面目に答へた。「でも憐れなペンニーは大變疲れてゐました。ジエムミーも大變弱つてゐました。二人分の仕事をしたのですもの。哨兵はジエムミーの番で、兄さんの番ではなかつたのですが、ジエムミーがあまり疲れて

ゐましたので、ペンニーは疲れてゐても、自分のことは思はなかつたのです」

「お前さんの言ふことはどういふのですね、嬢ちやん。もつと此處へ御出で。私には解らん」と親切な大統領は事の眞實を確めるために熱心になつた。

プロスソムは側へ寄つて往つた。大統領は優しく彼女の肩に手を載せて、その蒼い心配さうな顏を自分の方へ向けさせた。彼は大變丈の高い人で、おまけに合衆國の大統領である。そんなことが、茫然プロスソムの心に浮んだ。でも、彼女は單純に眞直にその話を話して、ペンニーの手紙をリンコーンの手に渡した。

大統領は注意してそれを讀んだ。それから洋筆を取つて、二三行急がしく書いて、呼鈴を鳴した。

プロスツムは命令の言葉を聽いた。「直ぐこの急用の手紙を送れ」

大統領はそれから娘の方へ向いて、「家へ歸つて、嬢ちやん、お前さんのお父さんにお詫しなさいね。あのやうな息子の生命を取らうとしても、尙ほ國家の宣言を重んじたお父さんにね、アブラハム・リンコーンがそんな生命はあまり貴くつて失ふのは惜しいと思ふと言つたと話しなさい。さ、お歸り、さもなくば明日までお待ち。ベンニーはそれほど大膽に死に就うとしたのだから、お前さんと一緒に歸るやうにしてあげませう」

「有難うございました」と言つたプロスツムは心から神に祈を聽れたことを感謝した。

それから二日經つと、若い兵士は小さい妹と一緒に大統領の官舍に來た。彼は大統領の私室に呼れて、そして中尉に任ぜられた。「病

める友の荷を擔ひ、不平も言はずにそのために死する兵士は國家の寶である」とリンコーンが言つた。

やがてベンニーとプロスツムとは綠山のその家に歸らうとした。大勢の人達がミル停車場まで出迎へた。農夫オウエンは息子の手を堅く握つて、涙を流しながら、熱心に、「神さまは有難い」と言つた。

ジー川の水車屋の話

昔ジー川の邊に英國で一番幸福な水車屋が住んでゐた。彼は常に朝から晩まで忙しかつた。そして常に雲雀のやうに樂しく歌つてゐた。彼の愉快な樣子を見ると誰でも愉快になるほどであつた。國中の人が誰でも彼の愉快さうなのを風評した。遂にその事が王樣に聽えた。

「その不思議な水車屋の所へ行つて話して見たいものだ」と王樣が言つた。「その幸福な譯を聽きたい」

王樣が水車場の側に歩みよると、水車屋はかういつて歌つてゐた。

「おれは誰をも羨まぬ。羨まないよ、この俺は。
おれはおれ相應に幸福だ。
誰もおれをば羨まぬ」

「お前は間違つてゐる」と王樣が言つた。「大變な間違だ。私はお前が羨ましい。お前のやうに氣輕に出來るなら、私は悅んでお前と位置を變へたい」

水車屋は笑つて、王樣に辭儀をした。

「とんだことを仰しやいます、王樣」と彼は言つた。

「話してはくれまいか」と王樣が言つた。「お前がこんな穢い水車場に居つて、これほど愉快に樂しく暮してゐる譯をな。私は王であるが、毎日悲しい、心配してゐる」

水車屋は再び笑つて、「王樣はどうして悲しいのか存じませんが、

私の嬉しい譯はなんてもありません。私は自分の食物を稼いで、妻子を愛してゐます。私は友達を愛し、友達も私を愛してくれます。又人に一文の借金もございません。それてどうして幸福てないことがありませう。茲にジー川があつて、毎日私の水車を廻してくれます。水車は妻子や私を養ふ穀物を磨いてくれます」

「成程」と王様が言つた。「お前は茲て幸福に暮すが善い。私は美ましく思ふ。お前のその塵だらけの帽子は私のこの金の冠よりも價がある。お前の水車は私の王國が私のためになるよりもお前のためになるのだ。お前のやうな人が澤山にあれば、この世界は善い所なのだ。さやうなら」

王様は向き直つて、悲しげに立ち去つた。水車屋も又仕事を始めて、歌つた。

「あゝ、おれはおれ相應に幸福だ。
ジーの川邊に住めばこそ」

畫家ベンヂャミン・ウエストの話

一

一千七百三十八年米國ペンシルヴァニアのスプリングフィルドの町に、ベンヂャミン・ウエストといふ赤坊が生れた。その父母と近所の人々はこの赤坊から不思議な事を見た。

親の友達である年老つた説教家はこの子の行末を豫言して、米國の開けた以來、最も有名なる人物の一人になるだらうと言つた。

小さいベンは別に變つたこともなく滿六歳になつた。彼が七歳になつた或る夏の午後、お母さんはベンに扇を持せて、搖籠に寢てゐ

る小さい赤坊の顏にとまる蠅を追ふやうに言ひつけた。

子供はあちこち扇を動かして、赤坊の顏にうるさくたかる蠅を追ひ拂つた。蠅は窓から飛び去つたり、遠くの室に飛んで行つたりしたので、ベンは搖籠を覗き込んで、睡つてゐる赤坊をつくづくと眺めた。

實際それは大變奇麗な光景であつた。小さな子は搖籠の中で平和に眠つてゐる。蠟のやうな手を頤の下にいれて、天使が耳のそばで子守歌でもうたつてゐるやうに靜かに心地よささうに睡つてゐる。實際天國の夢でも見てゐるやうであつた。ベンが搖籠を覗いてゐると、赤坊は無心に笑つた。

「奇麗なものだな」とベンは心の中で言つた。「こんな奇麗な笑ひがいつまでも續かないのは惜いな」

ペンはその頃未だ、一瞬の間に現はれたり消えたりする顔付を百年も續かせる不思議な技術があることを聽いたことがなかつた。誰もその技術のことをペンに話したものはないので、彼は自分でそれを發明したと言ふべきである。

手近の卓の上に、洋筆と紙と黑赤二色のインキがあつた。子供は洋筆と一枚の紙を取つて、搖籠の側に坐つて、赤坊の似顔を書き初めた。忙しく筆を動してゐると、お母さんの足音が聽えたので、ペンは急に紙を隱さうとした。

「ペンヂャミンや、お前、なにをしてゐたの」とお母さんは子供の當惑してゐる顔色を見て、問ねた。

最初ペンは話したくなかつた。赤坊の顔を盜んで、紙に書きつけるのは惡い事ではないかと思つたからである。併しお母さんが言ひ

張るので、ペンは遂にその繪を差出して、叱られるのを覺悟するやうに、首を垂れた。然るにお母さんは赤と黑のインキで、紙に書いてあるものを見て、驚きと悅びの叫び聲を發した。

「まあ、これは小さいサリーの顔ではないの」

やがてお母さんはペンを抱へて、柔しく接吻した。それから彼はお母さんに描いた繪を見せるのを怖がらなかつた。

ペンが段し大きくなると、自然の色や形を見るのを無上に樂しみにした。例へば春の綠な菫、夏の野薔薇、早秋の紅の僧正花などを大變好きになつた。年の暮に、森が虹のやうに樣々な色を呈すると、朝から晩まで眺めても尙ほ飽きないのであつた。

日沒の紫や金の雲はペンの歡喜であつた、彼は絕えず小舍の戸や床に白墨の片などで、木や人や山や馬や家畜や鷲や鴨や白露鷄を描

いた。

その頃はモホーク土人がまだペンシルヴニアに住んでゐた。毎年その土人は先祖の住んでゐたスプリングフィルドに遊びに來た。

この土人共は小さいペンを可愛がつて、その顏を塗るに用ひた赤や黃の顏料を分けてくれた。彼の母は又藍の片をペンにくれた。そこて赤、青、黃の三つの繪具が出來た。そして黃と青とを混ぜて綠を作ることが出來た。

わがペンは大歡びをした。そのお禮として、土人が羽や鉞や弓矢を持て異樣な服裝をしてゐる肖像を書いてやつた。

けれども若き美術家は今だに繪の刷毛を持たなかつた。フィラデルフィアにゆかなければ、買はうとしても刷毛がないのてあつた。だが、彼は中々利巧な子なので、自分て刷毛を作らうとした。どん

な工夫をしたと、思ひなさる。爐邊に靜に睡つてゐた大きな年老つた黑猫がゐた。

「プスや」と小さいペンが猫に言つた。「お前の尻尾の尖の毛を尠しおくれよ」

鄭寧に黑猫にかう言つたが、ペンは黑猫が承知しても仕ないても、毛を切うと決心した。プスは美術にあまり熱心てもないので、出來るなら毛を與るまいとしたらう。所て子供はお母さんの鋏を持つて來て、繪刷毛にするだけの毛を早くも切つてしまつた。その刷毛が大いに役に立つたので、プス夫人は幾度も毛を用立てた。遂にはその溫な毛皮が薄くなつて、冬中大弱りてあつた。

可哀さうに、猫は仕方なく烟突の隅に入り込んて、悲しさうな顏付をして、ペンを見てゐた。ペンにとりては、プスが溫かてあるよ

りも、繪刷毛の方が一層大切なのであつた。

二

その頃父のウエストを訪ねて、同じフレンド教會員であるフイラデルフィアのペンニングトンといふ人が來た。

そのお客さんは客間に入ると、土人の酋長の肖像や、美しい羽の鳥や、森の花の繪などが、一杯飾つてあるので吃驚した。こんな事はフレンド教會の百姓の家には何處でも前に見なかつた。

「ウエストさん」とフイラデルフィアの商人が言つた。「これほどの繪で壁を飾るには餘程かゝりましたらう。どこでお求めになりましたか」

そこでお父さんのウエストはこの繪は皆小さいペンが赤と黄の顏

料と藍の片と黒猫の毛で作つた刷毛で描いたことを説明した。

「成程な」とペンニングトンさんが言つた。「息子さんは不思議な才を持つてゐるんですな。私共の教會員の中にはかういふ物を贅澤品のやうに思ふものもありますがな。小さいペンヂャミンさんは繪師になるやうに生れて來なすつたのだな。神は私共より賢いですからな」

性の善い商人はペンヂャミンの頭を撫で、不思議な子供だと思つたらしい。兩親は子供の繪が讃められたので、歡びはしたものゝ、さて繪を描いたら、どれほど偉い有用な人物になれるのやら、解らなかつた。

ペンニングトンがフイラデルフィアに還つてから間もなく、或る晩小さいペンの許に小包が屆いた。

「なんだらう」とペンは小包を手にして考へた。「こんな物を送つて下

すつたのは誰だらう」

厚い包紙を開けて見ると、見よ、種々な繪具をいれた繪具箱と、種々な大きさの刷毛がある。それはペンニングトンさんの贈物であつた。それから美術家が繪を描くに用ゆる畫布や美しき風景の版畫などがあつた。これはペンが自分の畫のほかに、初めて見た畫であつた。

その晩は小さい美術家にとりて嬉しき夜であつた。寢る時に枕許に繪具箱を置いたが、一寸も睡ることが出來なかつた。長い夜の間、暗黑で頭の中に繪を描いてゐた。

朝になると、大急ぎて屋根部屋に上り込んで、晝食まで出て來なかつた。晝に食物を一口か二口喰つて、大急ぎてまた屋根部屋に上り込んだ。

翌日もその翌日も、いつも忙しさうであつた。遂にお母さんは何をしてゐるか確めようと思つて、屋根部屋について行かれた。

戸を開けて見ると、最初に眼についたのは、ペンが美しい畫を仕上げてゐる所であつた。彼は版畫の二つを寫して、それて一つの畫を描いた。それは手本よりも美しいほど巧く出來てゐる。草も木も水も空も家も皆適當な色彩て描いてあつた。日光や影も自然を見るやうてあつた。

「まあ、なんといふ巧く出來てるだらう」とお母さんが叫んだ。

お母さんは大歡びてある。お母さんの鼻の高いのも無理はない。この畫の運筆は一生を美術に費した老美術家に見せても耻かしくないものてあつた。その後幾年か經つて、この名畫は倫敦の美術協會に出品された。

それから時は經つた。ベンヂャミンは絶えず繪を描いてゐた。今や一生の職業を選ばねばならぬ齡になつた。お父さんもお母さんもどうしたものだらうと大變心配した。

フレンド教派の考想によると、實際上世の中のためにならぬ職業に從事するのは正しいこととてなかつた。ベンヂャミンの畫から、世の中はどんな利益を得るであらうか。これは困難な問題であつた。どうしたものかと思つて、兩親は教派の說教者や賢い人々に相談することにした。彼等は會議室に集つて、この事を相談した。

遂に賢い判斷はなされた。神はベンヂャミンを繪師になさるつもりであることが明らかなので、他の仕事をやらせるのは無理である。故に當人の願望に反對しないことにした。美しい繪を見れば、善き書物や賢い議論と同じやうに人を教ゆるものであることを承認した。

そこで神の導きのまに〳〵若者を進ませることにした。老人達はベンヂャミンの頭に手を按いて祝福した。婦人達は優しく彼に接吻した。彼が世界を漫遊して、古今の名畫を學んで、繪師となることに、皆同意した。

わがベンヂャミンは兩親の住居、鄕里の森や流、スプリングフィールド教會の人々、最初繪具をくれた土人を後にして出かけた。今まで知つてゐた場所や人々を離れて、再び還らなかつた。彼は先づフィラデルフォアへ行つて、それから歐羅巴に渡つた。

彼は二十五歳で、倫敦へ行つて、美術家として世に立つた。次第に彼の畫は有名になつて、國王ジョージ三世の畫工長となり、帝國美術協會長となつた。

「基督病める者を癒す」といふ彼の繪は、倫敦の美術協會に出品され

てゐる。その側に小さな風景畫がある。これは小さいペンが父の家の屋根部屋で、ペンニングトンから貰つた繪具箱で版畫を見て描いたその畫てある。

彼は平和と名譽の永の年月を送つて、一千八百二十年八十二歳で世を逝つた。彼の一生は小說のやうに不思議てあつた。亞米利加の荒野のフレンド敎派の小さい無名の子供から當時最も有名なる英國の畫工になつたのてある。

我等もベンヂャミン・ウエストのやうに生來の能力を善く用ひて、世のため人のために盡したいものてある。

王様を救へる鷹の話

成吉斯汗は偉い王様て又勇士てあつた。支那や波斯に軍勢を出して、多くの國を征服した。何處へ行つても、彼の勇しい働は風評された。アレキサンダー大王以來、この人ほどの王様はないと言はれた。

戰爭の無い時のことて、或る朝彼は森へ行つて一日狩をした。多くの友達が彼と一緒に行つた。弓矢を携さへて、樂しさうに馬へ乘つて出かけた。後から臣下達と獵犬がついて行つた。

狩は樂しかつた。森は叫びと笑ひ聲に鳴響いた。晩には多くの獲

物を持つて歸るつもりであつた。

王樣の手頸にはその可愛がつてゐる鷹が留つてゐた。當時は鷹を狩に用ひたものである。主人の一言で、鷹は空中に高く飛んで行つて、獲物を探した。鹿や兎に目がつくと、矢のやうに速く舞ひ下るのであつた。

その日一日成吉斯汗と伴の者達は森の中を乘り廻した。けれども想つたほど澤山な獲物はなかつた。

暮方に家路に着いた。王樣は幾度も森の中を通つたので、路を能く知つてゐた。伴の者が近路を行つたのに、自分だけは二つの山の間の谷を通ずる長い路を行かれた。

その日は暑くつて、王樣は大變喉が渴いた。可愛がつてゐる鷹は手頸を放れて、飛び去つた。鷹は歸途を能く知つてゐるのである。

王樣はそろ〳〵と馬に乘つた。骨で路の側で清い泉を見たことがある。今もあるかしら。夏の暑い日なので、山の小川は皆水が枯れてゐる。

遂に嬉しくも岩の端から水が滴つてゐるのを見つけた。上の方には泉があるらしい。雨の繁い時には、水の流が混々と茲に注いでゐるのである。今は唯時々滴るばかりである。

王樣は馬から飛び降りた。狩の袋から小さい銀の洋盃を出して、たく〳〵と落つる滴を受けやうとした。

洋盃が一杯になるには長く懸つた。玉樣は待切れぬほど渴いてゐた。遂にあらかた一杯になつたので、洋盃を口につけて、飲うとした。

その時空中に羽叩きの音がして、洋盃を手から叩き音した。水は

皆な地に零れた。

王様はそんな事をしたのは何かと思つて、上を見ると、それは自分の可愛がつてゐる鷹であつた。

鷹は二三回あちこち飛んで、やがて泉の側の岩に停つた。

王様は洋盃を取り上げて、又滴る水を受けやうとした。

今度は長く待つてゐられなかつた。洋盃に半分ほど水が入ると、それを口に持つて行つた。所がそれを口に當るや否や、鷹は又舞ひ下つて、手からそれを叩き落した。

今や王様は怒り出した。それでも又水を受けた。すると三度鷹は王様の水を飲むことを妨げた。

王様は大變に怒り出した。

「貴様はどうしてそんな事をするのか」と叫ばれた。「私の手が屆けば、

成吉斯汗鷹を殺す

頸を締るぞ」

王様は又洋盃に水を充した。飲うとする前に、劍を拔いて、

「さあ、鷹殿、これが最後だぞ」と言つた。

恁う言ひ終らぬ先に、鷹は舞ひ下つて、手から洋盃を落した。所が、王様はそれを見てゐたので、劍で鷹を一打にした。

憐れな鷹は血だらけになつて、主人の足下に落ちて死んだ。

「あんな事をするから惡いのだ」と成吉斯汗が言つた。

所で洋盃はどうしたかと見ると、二つの岩の間に落ちて、とても取れさうもない。

「どうしても、この泉の水を飲ねばならぬ」と彼は獨語を言つた。

そこで王様は峻しい岩を攀登つて、水の滴る所へ行かうとした。

中々の骨折で、高く登れば登るほど、喉が渴いた。

遂に其處へ着いた。そこには池があつた。所で池には何が横はつてゐたでせう。それは大變大きな毒蛇がその中に死んでゐるのであつた。

王様は立留つた。喉の渇いてゐるのも忘れた。自分が殺して下の地に横はつてゐる憐れな死んだ鳥のことを考へた。

「鷹は私の生命を救けたのだ」と王様は呟んだ。「その報ひにどんなことをしたか。鷹は私の最も良い友達だつたのに、私は殺してしまつた」

王様は崖から降りて、静に鳥を拾ひ上げて、狩の袋に入れた。それから馬に乗つて、家に急ぎ歸つた。彼は獨語を言つた。「今日は悲しい教を受けた。即ちどんな事があつても急つてはならぬととてある」

マッチ賣の少女の話

非常に寒い。雪が降つて、もう暗くなりさうだ。晩になつた。大晦日の晩である。寒い暗い中を、憐れな小さい女の兒が何も被らずに素足で街の中を歩いてゐた。家を出る時には確に上靴を穿いてゐたのだが、その上靴が何になるものか。ばかに大きな上靴で、これまでお母さんが穿いても、まだ大きかつた。小さい娘はそれを穿いて路を横切らうとすると、二つの馬車が非常に速くがら〳〵やつて來たので、上靴を失してしまつた。片方の上靴は見つからなかつた。見つかつた片方を男の子供が拾つて、持ち逃げをしてしまつた。彼

は自分に子供でも出來る時になつたら、搖籠に用ゆるに善いとても想つたらしい。そこで小さい娘は跣足で歩いた。その小さい足は寒さにまるで赤く蒼くなつてゐた。古い前掛にマッチを澤山いれて、手にも一束のマッチを持つてゐた。一日中誰もそのマッチを買つてやらず、又誰も一錢もくれなかつた。

寒さと飢にぶる〳〵しながら、そろ〳〵と歩いた。不幸な憐れな小さい娘の有樣である。雪はひら〳〵と娘の頸の上に奇麗に縮れて垂れ下つてゐる長い美はしい髪に積つた。でも、少女は今そんなことを考へてゐなかつた。どの窓にも燈がきら〳〵してゐた。燒いた鵝の美味さうな香がぷん〳〵する。明日は正月だ。さやう、少女はそのことを考へた。

二軒の家の間の隅に、一方が他の家の方に突出た所があつたので、

少女は屈んで坐つた。小さな足を並べて見たが、益々寒くなつた。それでも家に歸らうとしない。何にもマッチを賣らないので、お金を一錢も持つて歸らなければ、お父さんに打たれるに相違ない。それに家へ歸つても寒いのは同じことである。いくら大きな穴を藁やボロで塞いでも、風がひゆう〳〵入り込む屋根のほかには、何にもないからである。

少女の小さい手は寒さに感がなくなつた。あゝ、マッチを束から一本拔いて、壁で擦つて、手を溫めたら、どんなに善いだらう。少女は一本拔いて擦つた。パッと燃えた。小さい蠟燭のやうに、溫かな輝く焰に手をあぶつた。それは不思議に小さい光であつた。それは實際少女にとりて、輝く眞鍮の足と眞鍮の覆被をした大きなつやつやした暖爐の前に坐つてゐるやうであつた。火はどんなに燃えた

らう。どんなに快くあつたらう。ところて小さい焔は消えて、暖爐は見えなくなつた。唯手に殘つたのは、燃えたマッチの遺物ばかりてあつた。

二度目に又壁にマッチを擦つた。パッと燃えた。光が壁を照すと、壁は薄い幕のやうに透き通つて、そこから部屋の中が見える。食卓には雪白の布が懸けられて、その上にびか〳〵する御馳走が並んでゐる。燒いた鵞がうまさうに燻つて、林檎と干梅が詰込んてある。見てゐると、その鵞が皿から跳び出して、胸に小刀と肉叉をつけたまゝ少女の方へ床の上をよろ〳〵しながら歩いて來た。やがてマッチは消えて、唯厚い濕つた冷たい壁が少女の前にあつた。少女は又マッチを點けた。すると自分は美しいクリスマスの樹の下に居つた。嘗て硝子の窓越に金持の商人の家て見たものよりも、大きくつて、

もつと飾つてある。幾千の蠟燭は綠の枝に點してあつた。繪草子屋て見るやうな彩色畫がそれを見下してゐた。少女は其方へ手を擴げた。やがてマッチは消えた。クリスマスの燈火は次第に高く昇つた。今や天の星のやうに見えた。その一つは長い火の尾を引いて落ちた。

「誰か死んてゆく」と少女は想つた。唯一人自分を愛してくれた亡くなつたお祖母さんが、星が落ちると、誰か神さまの側に昇るのだと話して下すつたことがある。そこて又壁てマッチを擦つた。又パッと明るくなる。その明るみの裡に、年老つたお婆さんが鮮かに輝いて柔しく愛らしく立つてゐる。

「お祖母さん」と少女は叫んだ。「私を一緒に連れて行つて下さい。マッチが消ると、お祖母さんは行つてしまふてせう。お祖母さんも溫なか火や、溫かな食物や、大きなさら〳〵するクリスマスの樹のや

うに消えてしまふてせう」

少女はお祖母さんをいつまでもそこに居らせたいと思つて、マッチの束全體を急いで擦つた。マッチはぽつ〳〵と燃えて、晝間よりも明るくなつた。お祖母さんは決してそんなに大きく、又そんなに美しいことはなかつた。お祖母さんは少女を腕に抱いて、光明と歡喜を以て地の上を高く高く飛んだ。そこには寒さも飢も心配もなかつた。二人は神さまの御許に往つた。

けれどもその隅には壁に倚懸つて、あはれな娘が赤い頰をして、笑ひ顏をして、舊年の大晦日の晩に凍つて死んでゐた。新年の旭日は小さい屍を照した。少女はそこに坐つて、硬く冷たくなつてゐた。側にマッチがあつたが、その一束は燃えてゐた。「溫たまらうとしたのだな」と人々が言つた。誰も少女の見た美しい事を想はなかつた。

どんな榮光の裡に、少女が正月元旦にお祖母さんと一緒に天に行つたかを想はなかつた。

ベトーベンの月夜の曲の話

ボン町(獨逸の)てのことてあつた。ある月の明るい冬の夜、私はベトーベンを訪ねた。散歩してから一緒に晩餐を喰べるつもりてあつた。とある暗い狹い巷路を通ると、彼は突然立留つて、「靜に」と言つた。「あれ、あの音を御聽きなさい、私の作つたFの樂てす。中々上手に彈いてゐる」

それは小さい賤しい家てあつた。私共は立留つて耳を傾げた。樂の音は進む。終り頃になつて、突然彈くのを止めて、啜泣く聲がした。「私、もう彈けません。ほんとに美しいてすもの。私などの力に

はおよびません。こんなことては、私、コロンの演奏會に行つて見たいわ」

「ねえ、妹」ともう一人が言つた。「どうも出來ないのに悲しんだつて仕方がないさ。家賃を拂ふのも漸くなのだから」

「それはさうてすが、私、一生に一度てよいから、ほんとうに善い音樂を聽いてみたいわ。てなければ、駄目てすもの」

ベトーベンは私を見て、「家内に入りませう」と言つた。

「入るんてす?」と私が叫んだ。「どうして入るんてすか」

「私、この女のために彈いてやります」とベトーベンが感激して言つた。「この女には、情も天才も理解力もあります。だから、彈いてやつたら、解るてせう」

私が留めやうと思ふ間に、彼は戸に手をやつて、開けて入つた。

蒼い顔の若者が食卓の側に坐つて、靴を製つてゐた。その側に、古風なピアノに悲しげに倚りかゝつて、年少い娘がゐた。光のある髪が房々と面に落ちかゝつた。兄妹はさつぱりとはしてゐるが、身窄らしい服裝をしてゐた。私共が入つてゆくと、びつくりして、此方を振向いた。

「御免なさい」とベトーベンが言つた。「音樂を聽いて、思はず入つて來ました。私は音樂者です」

娘は赧い顔をした。若者は眞面目になつて、稍々面恥しがつた。

「それから—それから、貴君の言葉を立聽きしました」とベトーベンが言つた。「聽きたいと言ひましたね。それで、お好みなら、私が彈いて見せませうか」

なんとなく全體に條理が合はぬ所があつた。語る者の素振にも滑

稽な愉快な調子があつた。謎は忽ち破れて、皆想はず笑ひかけた。

「有難うございます」と靴つくりの若者が言つた。「ですが、ピアノはこんなに破れかゝつてますし、それに譜がありませんで」

「譜がない」とベトーベンは聽きかへした。「それなら、どうして嬢さんは—」と言ひかけて、顔色を變へた。娘の顔を見ると、盲目であつた。「どうぞ御免なさい」と口ごもつた。「ちつとも氣がつきませんでした。すると耳おぼえでお彈きになるのですね。どこで譜をお聽きになつたですか。演奏會にもそんなに行らしつたことがないといふのに」

「私共は二年の間ブルールに住んでゐたことがありますが、そこで近所のある御婦人が御練習なさるのをいつも聽きました。夏の晩など、その窓が開いてをりますので、私はその前をあちこち歩きなが

ら聽いてをりました」

娘はベトーベンが何んとも言はないので、はにかんだ。ベトーベンは靜にピアノの前に坐つて、彈き始めた。彼が最初の弦を打つか打たぬのに、私は今夜いかに立派な樂が奏されるかを知つた。私の想ふ所は間違はなかつた。私は幾年も彼を知つてゐたが、盲目の娘とその兄のために彈いてやつた時ほど美しき音を聽かぬ。彼は神與を感じた。指を樂鍵につけるや否や、古びた樂器の調子が美はしくも平になつて來た。

兄と妹は驚き又歎んで靜まり返つた。兄の方は仕事を片寄せた。妹は首を尠しかゞめて、手を胸に組合せて、ピアノの端の方へ蹲まるやうにした。恰もその魔術のやうな美しき音の流に心臟の破れるのを怖れるやうであつた。私共は皆靈妙な夢を樂しんでゐて、唯そ

の醒むることを怖れた。

突然一本の蠟燭の焔がゆれて、沈んで、ちら〳〵して、消えてしまつた。ベトーベンは手を休めた。私が窓をあけると、輝く月の光が溢れこんだ。室の中は前ほど明かつた。月の光はピアノと彈く人を照した。けれどもベトーベンの想ひの鎖はこの出來事のために途切れたらしかつた。彼は首を打垂れて、兩手を膝に載せて、深き想に沈んだ。暫くさうしてゐた。遂に若き靴工は起上つて、熱心に恭しくその側へ寄つた。

「不思議なお方と存じます」と若者は低い聲で、「どなたでゐられますか、貴君は」

「まあ、お聽きなさい」とベトーベンはFの曲の初めの方を彈いた。樂しい叫び聲がした。兄妹に彼が誰だか解つたのである。「では、ベ

トーベン様ですな」と兄妹は言つて、彼の手に涙を流して接吻した。

ベトーベンは起上つたが、私共は彼を引留めた。「もう一度彈いて下さい、もう一度」

彼は樂器の側に戻りたくないやうであつた。月は窓からきら〳〵して、彼の榮譽ある粗野な頭や大きな身體を照した。「それでは即席に月夜の曲を彈いて見ませうかな」と言つて、彼は空と星とに想をはせた。兩手を樂鍵につけて、悲しい又無上に愛らしき音を出した。その音は暗の世に月の光の靜に流れるやうに、樂器の上を靜にころがつた。

三度に渡つて、粗い錯綜した音が出るかと思ふと、芝の上を妖魔が躍るやうに、奇怪な合の狂言になつた。やがて迅い搖動する終曲になつて、息もつけないやうに、忙しく、ぶる〳〵する音律になつて、私共はさら〳〵と音のする翼に乘せられたやうな不確な漠然とした恐怖を感じた。私共は深く感動した。

「さやうなら」とベトーベンは椅子を除けて、戸の方へ向いて、「さやうなら」

「またお出で下さいませうか」と兄妹は一緒に尋ねた。

彼は立留つて、盲目の娘の顏を殊更優しく眺めて、

「え、え」と忙しく、「又來て、孃さんに敎へてあげませう。さやうなら、又來ますよ」

二人は默つて、見送つた。

「さあ、急いで還りませう」とベトーベンは言つた。「忘れない中に、先程の曲を書きつけたいから」

私共は急いで還つた。彼は曉方まで坐つて、その曲を書いた。こ

れは私共が大變好きな月夜の曲の起源であつた。

ベトーベンは最も偉い作曲家の一人で、一千七百七十年獨逸のボンに生れ、一千八百二十七年にヴィエンナで死んだ。ベトーベンの作曲から、音樂は新しい時代に入つた。彼の作曲は今だに持囃されてゐる。

アルフレッド王と菓子の話

昔英國にアルフレッドといふ賢く善い王樣があつた。その國を大變能く治めたので、アルフレッド大王と言つて、人民が尊敬した。

當時は王樣でも決して安樂ではなかつた。絶えず戰爭があつた。アルフレッドほど大將として善く戰つた人はない。國を治めることと戰をすることに實際忙しかつた。

デン人といふ激しい粗暴な種族が海を越して來て、英國と戰をした。デン人は人數も多いし、大膽で强いので、戰をするたびに勝利を獲た。英國は彼等の領分にされてしまふかも知れなかつた。

遂に大きな戰爭て、英國の軍勢は破れて散々になつた。皆生命からがらに遁げた。アルフレッド王も大急ぎて、森や沼の中に遁げ延びた。

その日晩く王樣は樵夫の小屋に來られた。大變疲れて腹が空いてゐたので、樵夫の內儀さんに何か喰べるものをくれ、それから小舍の中に睡せてくれと言はれた。

內儀さんは爐の側て菓子を焙いてゐた。憐れな身窄らしい男が腹を空して乞食に來たのを見て、それが王樣だとは思はなかつた。

「さうね」と內儀さんが言つた。「この菓子の番をしてゐて下されば、夕飯をあげませう。私は外へ行つて、牛の乳を搾らなければなりませんからね。私の出て行つた後て、菓子の焦げないやうに番をしなくつてはいけませんよ」

アルフレッド王は悅んて菓子の番をしてゐた。ところて種々大切な事を考へなければならなかつた。どうしてもう一度軍勢を集めようか。どうしてデン人を國外に追ひ拂はうかといふ事を考へて、彼は腹の空つてゐることを忘れた。菓子のことも忘れるし、樵夫の小舍に居ることも忘れた。唯彼の心は明日の計事に忙がしかつた。

間もなく內儀さんが還つて來た。菓子は爐の中て黑焦げになつてゐた。內儀さんは眞赤になつて怒つた。

「この忘け野郎」と怒鳴つた。「この樣を見やがれ。喰ふことばかり知つてゐて、何にも仕やがらない」

內儀さんは棒て王樣を叩つたといふ話だが、まさかそんな意地の惡い女てはなかつたてせう。

王樣はこんな事て叱られたので、腹の中て可笑かつたてせう。あ

まり腹が空つてゐたので、内儀さんの小言よりも、菓子を焦した方を殘念に思つた。

王様はその晩なにを喰はれたか、それとも夕飯を喰はずに寢床に入られたか、どうだか私は知らない。兎に角それから幾日も經ない内に、又軍勢を集めて、デン人と戰つて大勝利を獲られた。

「鐘を今夜鳴してはならない」

英國の太陽は小山の頂からそろ〳〵沒せんとした。悲しい一日の暮に美はしく地を照した。最後の光は男と女の額に美はしく接吻した。男はとぼ〳〵と疲れたやうに歩いてゐる。女は輝いた髪の毛をふは〳〵させてゐる。男はいかにも悲しさうに頭を垂れて、考へ込んでゐる。女は唇を眞蒼に冷たくしてゐる。「鐘を今夜鳴してはいけませぬ」と言ひたげなのを、やつと抑へてゐる。

「お坊さん」とベシーは白い唇をぶる〳〵させながら、古い牢屋を指さした。牢屋の塔は高く薄暗い。その壁は黑く濕つて冷たげてあ

る。「私の戀人はあの牢屋に居つて、夕の鐘が鳴ると同時に今夜殺されることになつて居ります。とても救かりません。クロムウエル樣（當時英國を支配せる主君）は夕方までにお出てになりませんでせうから」。かう言つて、ベシーは唇を益々蒼くして、しはかれた聲で呼いた。「鐘を今夜鳴してはいけませぬ」

「ベシーさん」と靜に年老いたる寺の役僧が言つた。その一言一言は怖ろしい毒矢のやうに、ベシーの若い心を貫いた。「永い〳〵年の間、私はあの薄暗い陰氣な塔から夕の鐘を鳴してゐます。毎夜日暮には、必ずあの鐘は時を告げて來たのです。鐘を鳴すのは、私の義務ですから、惡く思つて下さるな。こんなに年を老つても、自分の義務はしませんとな。鐘を今夜鳴さなければなりません」

ベシーの眼はあら〳〵しく、顏は蒼く、額は嚴にも白くなつた。

胸の裡では嚴な誓を立てた。裁判官が涙も流さず嘆息もしないで、讀んだ言葉をベシーは聽いて覺へてゐる。「夕の鐘の鳴る時、バシル・アンダーウッドは死せざるべからず」と。ベシーは息をせい〳〵した。眼は大きく輝いた。低い聲で呼いた。「鐘を今夜鳴してはならない」

ベシーは急ぎ足になつて、古い敎會の內に飛び込んだ。前のやうにとぼ〳〵と歩いて居る老人は置き去りにされた。少しの猶豫もなく、娘は目と頰を光らせて、鐘のぶら下つてゐる薄暗い塔へ登つた。その日の目に當つたことのない塵だらけの梯子を上へ〳〵と登つた。その白い唇から、「鐘を今夜鳴してはならない」といふ言葉が洩れた。

ベシーは梯子の頂に登つた。頭の上には大きな黑い鐘が下つてゐる。彼女の下は地獄へ行く路のやうに、眞暗で怖しい。見よ、大き

な鐘の舌はぶら〳〵してゐる。今や鐘の鳴る時刻である。その光景は彼女の胸を寒くし、息を止め、額を蒼くした。

この鐘を鳴さしめやうか。否、決して鳴さしてはならぬ。彼女の眼は突然の光に輝いた。その鐘の舌に飛び着いて、堅くそれを握んだ。「鐘を今夜鳴してはならない」

ベシーはぶら下つた。遠く市は唯一點の光のやうてある。天と地との間にベシーの身體はぶら下つてゐる。鐘はあちこちに搖る。役僧は年老つて聾なので、鐘の音が聽えないのてある。彼は若いパシルの埋葬の鐘を鳴してゐるつもりて、その鐘を鳴した。娘は益々堅く鐘の舌にぶら下つて、白いぶる〳〵する唇で、胸の烈しい動悸を止めるつもりて言つた。「鐘を今夜鳴してはならない」

鐘はやがて搖れなくなつた。もう終つたのてある。娘は又黑い古

い梯子に足を堅く着けた。それは百年前から人の足の登つたことのない梯子てある。彼女のなした大膽なる行爲は夕日の光が美はしく空を色どる時に、末長く語り草になるてあらう。頭の白い老いたる父はその子供等に向つて、その夜鐘の鳴らなかつたことを長く語るてあらう。

遠い小山からクロムウエルが來た。ベシーはそれを見た。彼女の額は望と喜に充ちた。心配の痕はなくなつた。クロムウエルの足下に伏して、その話をした。裂けて血の出てゐる其の手を出して見せた。悲しく蒼く疲れてゐても、彼女の顏には快い樂しさうな樣子があつた。クロムウエルはいかにも不憫に思つて、涙に眼を光らせて、

「安心してお出て、お前の戀人は救かります、鐘は今夜鳴さないことにします」

アンドロクルスと獅子の話

昔羅馬にアンドロクルスといふ憐れな奴隷があつた。彼の主人は殘酷で不親切な人なので、遂にアンドロクルスは逃げ出した。

彼は幾日も野の森の中に隱れてゐた。食物がないので、痩せて弱つて死にさうであつた、ある日洞穴に入つて、横になつて、直ぐ寢てしまつた。

暫くすると、大きな聲がするので眼が醒めた。獅子がその洞穴に入つて、聲高く吼えた。アンドロクルスは大いに怖れた。獅子に殺されるに相違ないと想つた。然し獅子が怒つてゐないことが直ぐ解

つた。足を怪我したと見えて、獅子はびつこを引いてゐた。

アンドロクルスは大膽になつて、獅子がびつこを引いてゐる前足を取つて、どうしたのかと見てやつた。獅子は靜然として立つてゐる。アンドロクルスの肩にその頭を擦りつけて、

「おれを助けてくれるだらうな」と言ふらしかつた

アンドロクルスが地から前足をあげて見ると、長い尖つた棘がそこに刺つてゐるのであつた。彼は指で棘の端を握んで、强く引張ると、それが拔けた。獅子は大喜びであつた。犬のやうに飛び廻つて、新しき友達の手や足を舐めた。

アンドロクルスはその後全く怖れなかつた。夜になると、彼と獅子とは横になつて、並んで寢た。

長い間獅子は毎日アンドロクルスに食物を持つて來た。兩者は仲

の善い友達になつて、アンドロクルスは新しい生活を樂しく送ることが出來た。

ある日兵士がその森の中を通つて、アンドロクルスの洞穴に居るのを見つけた。そして羅馬に連れ歸つた。

其の頃の法律によると、主人の許を逃げた奴隷は飢たる獅子と戰はされることになつてゐた。暫らく獅子に食物を喰せずにおいて、戰の時まで待せてあつた。

その日が來たので、幾千の人はその場所へ集つた。その頃は今日の人が觀世物かベース・ボールでも見にゆくやうに、さういふ場所に見物に往つた。

戸が開くと、憐れなアンドロクルスが連れ出された。彼は既に獅子の吼ゆるのを聽いて、恐れて死んでゐるも同樣であつた。彼は見物

人を見上げたが、誰も氣の毒さうな顏をしてゐる者はない。

やがて飢えたる獅子は飛び出た。一躍に憐れな奴隷の所へやつて來た。アンドロクルスは大きな聲で叫び出した。恐れてゞはない、嬉しくつてである。それは彼の舊友である洞穴の獅子であつた。

獅子に喰殺される人を見やうと待ちかまへた人々は吃驚した。アンドロクルスが獅子の頸に手を廻すと、獅子はその足許に伏して、懷しさうに彼の手を舐るのである。さては大きな獸が奴隷の顏に頭を擦りつけて、甘へるのであつた。見物人はなんのことやら、さつぱり解らない。

暫くしてから、見物人はアンドロクルスに其の譯を尋ねた。そして彼は見物人の前に立つて、獅子の頸に腕を廻しながら、自分と獸とが洞穴で一緒に住んでゐた話をした。

「私は人間です」と彼は言つた。「然るに誰も私に親しくしてくれません、この獅子だけは私に親切で、私共は兄弟のやうに互に愛してゐます」

人々はこの憐れな奴隷をむごくすることが出來なかつた。「生して自由にしてやれ」と口々に叫んだ。「生して自由にしてやれ」

他の人が又叫んだ。「獅子も自由にしてやれ。兩者とも自由にしてやれ」

そこてアンドロクルスは自由にされた。獅子は彼に與へられた。そこて兩者は永年羅馬て一緒に住んだ。

隱れたる寶の話

一

フエアフイールドの古い町の氣持の善い街道に、清楚した小さい家があつた。それは前にリード夫人の住居てあつた。夫人は近所の人から敬はれ、土地の若い人達から愛された。

リード夫人の親切なのには、知つてゐる者は誰ても悅んだ。それ故貧しかつたが、能く若い人達の世話をして、種々面倒を見た。

リード夫人は前から貧しかつたのてはない。その良人が生てゐる時には、富有なやうに想はれてゐた。所がその良人の亡くなつた後

ては、この寡婦に遺されたものは、二つの小さい家のほか何もなかつた。

その一軒の家に、リード夫人は住んで、もう一軒の方を貸していた。その家賃では普通に生活てゆくだけも六ケ敷かつた。他人のためにする餘裕などは何もなかつた。

ある寒い冬の朝、この家の樂しい居間で、二人の女が話しをしてゐた。一人はリード夫人で、もう一人はアリス・ブラウンといつて、この町の遠い親戚の家に厄介になつてゐる憐れな親のない娘であつた。

「いつもお訪ね下すつて、どうも有難う、アリスさん」とリード夫人が言つた。「どうしてこんなに御親切に來て下さるのか、不思議ですわ。何もあなたを引着ける者は茲にありませんのに」

「まあ、奥様」とアリスが答へた。「どうしてそんな事を仰やるのです。茲にあなたがゐらつしやるてはありませんか。いつも御親切なお言葉をいたゞくし、それからニコ〳〵してお迎へ下さるてはありませんか」

「それは、私、あなたが可愛いのよ、アリスさん。來て下さるのが、どんなに嬉しいか知れません」とリード夫人が言つた。「私の力に及ぶなら、いつも御一緒にゐたいと思ひますわ。あなたに書物をあげて、學校にやつて、それからあなたのためになることは何でも仕てあげたいと思ひますの。ところが、アリスさん、御存知のやうに貧乏で、仕たいと思ふことは何にも出來ません。さう思ふと、時々悲しくなります」

「奥様は、まあ何といふ御親切てせう。私の一番嬉しいことは、か

うして御伺ひして、あなたに御目にかゝることですわ。これからもどうぞ私を可愛がつて下さいまし。私は朝から晩まで、慾しておゐていたゞきたうございますわ。明後日はクリスマスですのね。今日は叔母さんが御手傳をするやうに待つてゐるてせうから、早く歸ります。それでは左樣なら」

「では、アリスさん、クリスマスの朝いらつしやいね。いゝてせう」

とリード夫人が言つた。

「はい、暫らくなら」とアリスが答へた。そして接吻をして、又左樣ならと言つて、歸つて行つた。

「なんといふ可愛い善い娘だらう」とリード夫人はアリスが街道を歩いてゆくのを見送りながら言つた。

「あの娘はこの夏私が病氣の時に親切にしてくれました。もうクリ

スマスだのに、あの娘に贈物を買つてやるお金もない。

あゝ、私はどうしてかう貧乏に取殘されたのてせう。良人が幾らか金を持つてゐたに相違ないのだに、それをどうしてしまつたものやら」

リード夫人は搖椅子に坐つて、半時間も火を見詰て考へてゐた。突然起上つて、獨語を言つた。

「さうだ。屋根部屋に行つたら、アリスさんを悦ばすやうなクリスマスの贈物が何かあるかも知れません。印度から送つて來たといふ珍らしい古い箱を良人が持つてゐるのを見たことがありましたつけ。リボンと絹の片を見つけて、それを裏づけて、アリスさんに奇麗な小さい仕事箱を作へてあげやう」

そこてリード夫人は狹い梯子段を昇つて屋根部屋に往つた。隅の

方にある屑の中を探して、漸くその箱を見出した。

それを持つて下に來て、絹の片を見つけて、その日一日仕事箱を拵らへにかゝつた。

奇麗な針差、小さいピン差、大きな苺のやうな金剛砂の袋を作つた。やがて自分の乏しい道具の中から、針やピンや絲やびか〳〵磨ぎすました唯た一本しかない小さい鋏をそれに容れた。

唯一つ買はねばならぬものは、指輪であつた。それは一錢で買へた。その指輪は眞鍮で、金のやうに立派に光つてゐた。

皆な容れて見ると、小さい箱はいかにも奇麗であつた。底には前から縫合せの裏があつたが、その上にこれらの道具を載せた。

二

クリスマスの朝になつた。早くアリスはリード夫人の家に來て、溫かに迎へられた。

「クリスマスでお目出度ございます」とアリスが言つた。

「お目出度ございます、アリスさん」とリード夫人が答へた。「午前だけでもあなたが私と一緒にゐて下されば、どんなに樂しいクリスマスでせう」

「お午までは居つてもようございます」とアリスが言つた。「こんな奇麗な贈物を從兄のジョンさんにいたゞきましたわ」とアリスは新しい紙入を出した。

「まあ、ほんとに奇麗だこと」とリード夫人が言つた。「それにお金を入れたら、尙善いでせうね」

「ほんとに、さうですわ」とアリスが笑ひながら叫んだ。「でも、ど

こからもお金は入つて來ないし、自分でも何にも持つてゐないてすから、この紙入はいつまても穢れませんわ」

「それも、さうてすね」とリード夫人が答へた。「併し家に物があるのは便利なものてすよ。いつか役に立つことがありますからね。一寸御免なさいよ、アリスさん。火の側へ寄つて、お溫りなさいな」

アリスは火の側へ坐つて、手を焙つた。麗はしい好い天氣だが、大變寒かつた。

リード夫人は次の室へ行つて、いかにも氣輕に、この日頃見たことがないほど樂しさうな顏をして、アリスのために作へておいた小さい仕事箱を取り上げた。

その箱を手に持つて居間に歸つて、アリスの側に寄つて言つた。

「アリスさん、拙らないものてすが、クリスマスの贈物にこれをあ

なたに差上げます。もつと善いものをと思つたのてすがね。これても役に立つてせう。御氣に入つて」

「まあ奇麗だこと」とアリスは箱の表面にある珍らしい彫刻に目をつけて叫んだ。「そして仕事箱てすのね」と兩手に箱を持つて、蓋をあけて、「これは眞實に私に下さいますの」

「あなたのほか誰にやりませうせう」とリード夫人はアリスの歡ぶのを見て、嬉しさに顏を光らしてゐた。

「まあ、なんと御禮を申したらいゝてせう」とアリスは叫んて、リード夫人の頸に腕を廻して、再三接吻した。

やがてアリスはリード夫人の側に坐つて、新らしい仕事箱の中味を調べ始めた。一つ〳〵品物を引出して、膝の上に載せた。

それからリード夫人が箱の中につけた美しい裏を讃めて、こんな